ricio / issociatea ricpo	sitory of Academic resouces
Title	タコノマクラ考 : ウニやヒトデの古名
Sub Title	Old Japanese names of echinoderms
Author	磯野, 直秀(Isono, Naohide)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2006
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 自然科学 No.39 (2006.) ,p.53-79
JaLC DOI	
Abstract	光陰矢の如し-私が初めて磯採集に足を運んだのは大学に入学した1955年の初夏,半世紀も昔の話になる。それまで磯には縁の無かった私がそこフラシ,赤覗かだをているシャヤリムがもウンボンチャク・岩陰から関いがたをなり、赤覗かでといるムラサキウニ、大きなアメウン・赤覗かでといるムラサキウニ、大きなアカウミ、赤覗かでといるムラサキウニ、大きなアカウミには黒くて大きなアンラン・赤覗かでといるムラサキウニ、大きなの形で、大きなアンラン・赤覗かでといるムラサキウニ、大きの魅力に取りつかれて、たびたび藁油字実験所でした、金ででは、大きな形を大きなの魅力に取りつかれて、たびたび藁油字実験所でした。一般ないので、中ででは、大学では、大学では、大学では、大学では、大学では、大学では、大学では、大

	タコノマクラとは違う場合があるのだ。しかも,事は込み入っていて,ある報文ではウニの仲間のカシパン,別の報文ではヒトデ,さらに別の報文ではクモヒトデを指している。もちろん,現在のタコノマクラを指す場合もある。一体全体どうなっているのか,さっぱりわからないままに数年が過ぎた。 そのうち江戸時代に足を踏み込んで,いろいろな資料を調べ始め,そのなかで「タコノマクラ」の名の混乱は江戸時代にさかのぼることが明らかになってきたので,棘皮動物―当時は「介類」や「魚類」に含められていたが一の記事に出会うたびにメモを取っておいた。 最近そのメモを見直してみると,信頼できる。そこで,材はほどあり,それに含まれる棘皮動物の記載例は数百に達する。そこです。それをまとめておこうの利力を表えてのが本報である。稿末の表に示した事例は,あるの数に当たるかが判明する場合にあまり、ナマコはおれなかった。以下の部分では,この稿末の表に基いてヒトデやカシパンな呼ばれなかった。以下の部分では,この稿末の表に基いてヒトデやカシパンで変遷を考なったのが本報である。資料の名はあまり、よくに明治期資料と断らるのでする。文中の「資料」は、の名称表に基いてヒトデやカシパンで変遷を考察する。文中の「資料」は、の名称表に基いてヒトデやカシパンで変響を考察する。文中の「資料」は、の名称の表に基いてヒトデやカシパンで変響を考察する。文中の「資料」は、の名称の表に基いてヒトデやカシパンで変響を考察する。文中の一時代資料番号、がおちなので、私は原則的に触れないのを基本によって、本稿ではその方命名の由来がわかるし、また命名の巧みさを感じ取ってほしいと思うからである。
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10079 809-20060000-0053

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

タコノマクラ考:ウニやヒトデの古名

磯 野 直 秀

Old Japanese Names of Echinoderms

Naohide Isono

光陰矢の如し――私が初めて磯採集に足を運んだのは大学に入学した1955年の初夏,半世紀も昔の話になる。それまで磯には縁の無かった私がそこで目にした生きものは、ほとんどが初顔だった――潮だまりには黒くて大きなアメフラシ、赤い花を咲かせているケヤリムシやウメボシイソギンチャク、岩陰から黒いトゲを覗かせているムラサキウニ、大きめの石の裏にはアオウミウシやクモヒトデ……。その世界の多彩な生きものたちの魅力に取りつかれて、たびたび葉山や三崎の磯を訪れるようになり、やがては無脊椎動物の発生学に進み、三崎臨海実験所で大学院時代を過ごすことにもなった。

磯採集でもっとも興味をもったものの一つは、さまざまな形態を示す棘皮動物だった。これはヒトデやウニの仲間で、基本的に5を単位とする放射相称の海産動物。これが本稿に登場する役者たちなので、馴染みの薄い方々のために、海浜でよく目にする種類をグループ別にざっと紹介しておく(図1参照)。

- ①ヒトデ類:多くは☆型で、中央の「盤」(本体)のまわりに5本の「腕」が伸びている。マヒトデ(図1-@)が典型的だが、筋目のある縁取りをもつモミジガイ、腕が8本あるヤツデヒトデ、糸巻に似たイトマキヒトデ(⑥)などもいる。なお、本報では「ヒトデ」を類名に用い、明治期文献のAsterias amurensis (旧称ヒトデ)は「マヒトデ」とした。
- ②クモヒトデ類:ヒトデに似ているが、腕が細長く、盤と腕の区別が明確(©)。腕が枝分かれして複雑になっているテヅルモヅル類(①)も見られる。
- ③ウニ類:よくイラストに描かれているように、半球状の殻からトゲが沢山出てイガグリのよ

^{〒232-0066} 横浜市南区六ツ川3-76-3-D210, 慶應義塾大学名誉教授。(76-3-D210, 3-chome, Mutsukawa, Minami-ku, Yokohama 232-0066, Japan; Professor Emeritus, Keio Univ.) [Received Sept. 5, 2005]

[●]本稿では、引用文の漢字と仮名に現行字体を用い、濁点・句読点・振仮名を適宜加えた。引用文中の() は原注、〈 〉は原本の振仮名、[] は磯野による注あるいは補足である。仮名が続くとき、単語に下線を付して読みやすくした場合もある。

うな形をしている普通のウニ (®) のほかに、一見ウニとは思えない姿をしたウニがある。 以前は歪形類(不正形類)と呼ばれていたグループで、殻の上面に花形の模様(花紋)が見 える。たとえば、円い皿型のカシパン類 (⑥)、その一種で、下面に蓮の葉脈のような溝が 見えるハスノハカシパン、5つの穴があるスカシカシパン (®) がある。ほかに、楕円型で やや厚みがあり、殻も頑丈なタコノマクラ (®)、卵形で殻の薄いブンブク類もいる。

- ④ウミユリ類:花のような「冠」と、それを支える「茎」がある(①)ので、「ウミユリ」(海百合)の名がついた。これはみな深海性だが、浅い所にはウミシダ(海羊歯)類が生息する。ウミシダは「茎」が無く、盤のまわりにシダの葉に似た腕が10~数10本出ており、盤の下の巻枝で岩にしがみついている(①)。ウミユリもウミシダも、初めて見たら植物と思うに違いない姿である。
- ⑤ナマコ類:サツマイモのような形(®)で、ウニやヒトデとはまったく異なるが、これも棘皮動物。食用にするので名が通っている。「このわた」は、その内臓の塩辛。

上記のウニの仲間に、タコノマクラ(蛸ノ枕、図1-0)という種類を挙げた。変わった名称なので、何時ごろからそう呼ばれているのだろうと気になっていたが、誰に聞いても知らないし、書物を見てもわからない。仕方なく、そのままになっていた。

1980年代の初め、私は動物発生学から大転換して歴史の方面に道を変えたが、そのとき最初に取り組んだのは、三崎臨海実験所の歴史だった。この実験所は明治19年(1886)に創立されたアジア最初の常設臨海実験所で、日本の動物学発祥の地と言っても過言ではない。そこで、実験所設立後まもなく動物学会が発刊した『動物学雑誌』の報文や記事を調べはじめたのだが、妙なことに気がついた。

当時の『動物学雑誌』には三崎などでの海産動物採集報告が少なくないが、それに登場する「タコノマクラ」が現在のタコノマクラとは違う場合があるのだ。しかも、事は込み入っていて、ある報文ではウニの仲間のカシパン、別の報文ではヒトデ、さらに別の報文ではクモヒトデを指している。もちろん、現在のタコノマクラを指す場合もある。一体全体どうなっているのか、さっぱりわからないままに数年が過ぎた。

そのうち江戸時代に足を踏み込んで、いろいろな資料を調べ始め、そのなかで「タコノマクラ」の名称に再会することになった。そして、「タコノマクラ」の名の混乱は江戸時代にさかのぼることが明らかになってきたので、棘皮動物――当時は「介類」や「魚類」に含められていたが――の記事に出会うたびにメモを取っておいた。

最近そのメモを見直してみると、信頼できる江戸時代資料が40件ほどあり、それに含まれる 棘皮動物の記載例は数百に達する。そこで、それをまとめておこうと考えて筆を取ったのが本 報である。稿末の表に示した事例は、図あるいは注記の記載内容から現在のどの類に当たるか が判明する場合に限った。また、ナマコは古くから「コ」「ナマコ」と呼ばれ、それ以外の名 称はあまり無かったので、本稿には入れなかった。

以下の部分では、この稿末の表に基いてヒトデやカシパンなどが江戸時代に何と呼ばれてい 54

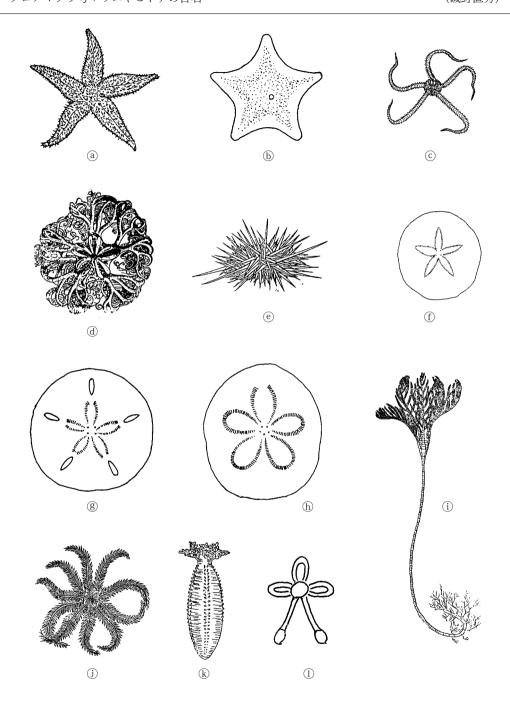


図1 代表的棘皮動物: @マヒトデ, ⑤イトマキヒトデ, ⑥クモヒトデ, ①テヅルモヅル, ⑥ウニ, ①カシパン, ⑧スカシカシパン, ⑥タコノマクラ, ①ウミユリ, ①ウミシダ, ⑥ナマコ, ①家紋の「総角」。 出典: @ⓒ⑥①⑥は資料M4『動物通解』, @は箕作佳吉著『動物新論』(成美堂, 1895年), ⑥①⑧ ⑥①は磯野画。

たかをまず検討し、最後に「タコノマクラ」の呼称の変遷を考察する。文中の「資料」は、番号にMがつくか、とくに明治期資料と断らない限り、すべて江戸時代資料である。資料名に付した()中の番号は稿末表の資料番号、西暦年は同表に示した刊年・成立年。

なお、生物名の語源解釈はコジツケになりがちなので、私は原則的に触れないのを基本方針としているが、本稿ではその方針を棚上げして語源に踏み込むことにしたい。それによって、 江戸時代の人々の命名の由来がわかるし、また命名の巧みさを感じ取ってほしいと思うからである。

1 漢名の混乱

江戸時代には、明で出版された『本草綱目』(李 時珍, 1596年刊)が日本の博物誌に大きな影響を与えたが、そのなかにある「海燕」の記述にあいまいな点があり、その漢名が日本のどの生きものに当たるかについて混乱を招いた。『国訳本草綱目』(春陽堂, 1929年)を基にして、原文を現代文に直してみると――

「時珍日く、海燕は東海に出る。大きさ一寸ばかりで、形状は扁く、面が円く、背上は青黒く腹下が白い。海螵蛸 [イカの甲] のように脆く、箪茵 [円い座布団] のような紋がある。口は腹下にあって細沙を食い、口の傍に五本の真直ぐ、あるいは鉤型に曲がったものがあって、それが即ち足である。『臨海水土記』に〈陽遂足は海中に生じる。色は青黒く腹が白く、五本の足があるが、頭尾が判らない。生きている時は体が柔らかだが、死ねば乾いて脆い〉とあるのが此物である」

この文の前半が指す品は、「扁く、面が円く」の表現からはカシパン類と思えるが、「五本の真直ぐ……即ち足である」の文からはヒトデかクモヒトデ、あるいはその両者のように取れる。結局、この文が混乱を招き、「海燕」が何かわからなくなった。一方、後半引用の『臨海水土記』の文では、「陽遂足」が明らかにヒトデ・クモヒトデ類を指している。

また、同じく明で出版された『本草原始』(資料3,1612年)には、「海燕」にヒトデの図が描かれている。ところが、同じ個所にある「海盤車」の図も、多少形は異なるが、やはりヒトデなのである。これも、混乱に輪をかけた。

このように漢書が不明確な記述をしていたため、漢名の「海燕」「陽遂足」「海盤車」が日本の何に当たるかがわからなくなってしまった。したがって、稿末の表にはそれぞれの著者が適切とした漢名を一応挙げてはあるが、以下の考察では原則として漢名に触れない。

2 ヒトデ類の古名

ヒトデ類を指す古名のうち、もっとも古いのは『訓蒙図彙』(資料4,1666年)の図に付された「タコノマクラ」で、稿末表に示した江戸時代資料41点のうち12点が挙げており(タコマクラも含む)、幕末期に及ぶ。意外にも「ヒトデ」の呼称はやや遅れて、『日東魚譜』(資料10,1736年)に初出する(資料4注①参照)が、以後普及して15点の資料に見られる。『日東魚譜』には「ウミモミヂ」(海紅葉)の名も添えられ、それを含めて「モミジガイ」系の名は計6点

に挙げられているが、現在とは異なって特定種の名称ではなく、これもヒトデ類一般を指した らしい。このほか、「五ツ手」「五ノ手」の名もあったが、用例は少ない。

どうやら、「タコノマクラ」がもっとも古い名らしい。ヒトデは普通は5本、種類によっては8本以上も腕をもつので、何本も腕をもつタコが休むのにちょうど良いとの見立てから「蛸ノ枕」と呼んだように思える。一方、「ヒトデ」は5本の腕を指と見て「人手」。後発のようだが、わかりやすく覚えやすいので広まったのだろう。

3 イトマキヒトデの古名

「イトマキ」「イトマキヒトデ」の名は『享保元文産物帳』(資料11注①,1735~38年)に数例見られる。いずれも図が無いので,現イトマキヒトデを指すと断定はできないが,特殊な名なので,その可能性が高い。図を伴う例は『奇貝図譜』(資料23,1802年以前)が最初であり,稿末の表では計7点の資料に挙げられている。「龍宮ノイトマキ」も4点に見られる。この種類は磯でもっとも多いヒトデの一つだし,五角形で昔の糸巻(四角形)に似ているという特徴のある形だからだろう,稿末表の事例ではヒトデ類の一般名ではなく,みな現イトマキヒトデを指す名として用いられている。

4 ヤツデヒトデの古名

「ヤツデ」(八ツ手)の名は3点の資料にしか現われない。第1例は資料25注⑩(1803年)にあり、明らかにヤツデヒトデを指す初出例である。2例目は『本草綱目啓蒙』(資料25,1805年)に出るが、これはヒトデの異名として挙げられているだけ。3例目は『目八譜』(資料36,1845年)で、図から間違いなくヤツデヒトデ。当時は広く使われたのではないが、8本の腕をもつという明白な特徴から由来した名は、そのまま現和名となった。

5 クモヒトデ類の古名

「クモヒトデ」の名は『本草綱目啓蒙』(資料25,1805年)に初出し、計5点の資料に記されている。「クモダコ」も2例あり、その細長い腕の形と動きが何となくクモ(蜘蛛)に似ていることに由来するらしい。一方、「タコノマクラ」の名でクモヒトデを指す例が2点の資料にあるが、ヒトデとクモヒトデは腕が5本という姿がよく似ているので、両者を区別せずにヒトデ・クモヒトデ類を一括して「タコノマクラ」と呼んでいた地域も多かったように思う。

腕の姿や動きの様子から「蛇」のつく名も多いかと思ったが、「ヘビノフクロゴ」(蛇ノ袋子?、 資料27、1810年以前)の一例しか無かった。やや、意外である。

6 テヅルモヅル類の古名

クモヒトデの仲間のテヅルモヅルは多数の腕があり、しかもそれを動かすという目立つ特徴をもつ。そして、漁網にからんで引き揚げられることも多い。それ故、早くから存在が気付かれていたらしく、『怡顔斎介品』(資料13、1758年)に図が出る。ただし、この図には漢名の海

盤車を添えるだけで、和名は記されていない。

その後に、「シワヒトデ」系と「テヅルモヅル」系の名が見られるようになる。

「シワヒトデ」は『享保元文産物帳』(資料11注①,1735~38年)に初めて現われるが,図も説明も無いので現テヅルモヅルを指したとはいえない。記述から「シワヒトデ」=テヅルモヅルと特定できるのは『物類彙考』(資料15,1776年)が最初で,表では計5点の資料がこの系統の名を記している。浜辺に打ち上げられて乾いたテヅルモヅルは皺だらけで,それが「シワ」の語源かという(重井陸夫氏私信)。

一方、「テヅルモヅル」の名は『本草綱目啓蒙』(資料25、1805年)に初めて現われ、これも 5 資料に記されているが、もともとは摂津や紀伊の方言らしい(➡資料32)。「テヅルモヅル」は「さまざまな議論があって結論が出ない状態」(資料32注①)のことという。動物本体を観察していると、「テヅルモヅル」は実に旨い命名と思う。その腕はまさに「手」のように動く「蔓」だし、その蔓はもつれるような動きを見せる。「テヅルモヅル」はその蔓の動きにもぴったりの表現である。一方、蔓が手のようにも、藻のようにも見えるので、「手蔓藻蔓」との即物的見解もできる(重井陸夫氏私信)。テヅルモヅルには、「手蔓藻」「テンヅルモンヅル」「テンツクモンツク」など派生した呼び方も多い。

そのほか、「マツダコ、ツナツカミ、シャグマ、ハナダコ」など、さまざまな方言があるが、 これらは局地的にしか使用されなかったらしい。

7 正形ウニ類の古名

正形ウニは半球型の殻をもつもっとも普通のウニで、トゲの長いムラサキウニや、トゲの短いバフンウニなどが今も磯に数多く棲んでいる。「ウニ」と「カセ・ガゼ」はこの正形類を指し、表には入れていないが、早くも『出雲風土記』(733年)に「蕀甲蠃〈うに〉・甲蠃〈かせ〉」、ついで『本草和名』(資料1、918年頃)や『和名類聚抄』(資料2、931~935年頃)に記されていて、現在まで使い続けられている。

もっとも、ウニとガゼの違いは明確ではない。『甲子夜話』(資料31,1821年序)は、『和名類聚抄』の記述(資料2注①・②)をもとに、トゲの長いのがウニ、短いのがガゼと言い、『出雲風土記』の使い分けにも合う。一方、『庖厨備用倭名本草』(向井元升著、1684刊)は、ガゼは本体を指し、ウニは食用にする部分(生殖巣)の名とする。しかし、江戸時代資料を検討すると、どちらの説も一般化できない。単に、地方による方言の違いかもしれない。

ともかく、「ガゼ」系は江戸時代資料のうち12点、「ウニ」は11点に記されていて、ともに普通の呼び名だったとわかる。これ以外にも、「海栗」が5点、「イガグリ・イガ」が4点、アイヌ語系の「ノネ・ノナ」が4点、琉球方言の「ガヅツ」が2点の資料に見られる。

注目されるのは、「オキノクワンス」(阿波、資料13・36)、「オコゼノクハンス」(姫路、資料26)、「ドモリクハンス」(土佐、資料26)と、「クヮンス」の語がつく例。これは「鑵子」で茶釜のこと。半球型の殻をそれに見立てた西国方言と思われるが、その後は消え去ったようである。

8 カシパン類の古名

17世紀には和歌の三十六歌仙になぞらえて36品の貝と和歌を組合せることが流行ったが、それから派生して貝の収集家が誕生し、『百介図』や『追補介図』(資料5・6)の図も作られるにいたった。その『百介図』に、カシパンの図が「桔梗介」の名で初出する。カシパンが死ぬと、短いトゲが落ち、やがて殻も白くなって上面にある花紋(前述)も目立つようになり、置物になるほど美しい姿になる。その5 弁の花型模様をキキョウ(桔梗)に見立てて、「桔梗介」と名付けたのである。この名は江戸時代資料41点中9点に見られる。

花紋を桜花と見た「サクラガイ」の呼び名も4点、家紋のひとつ「総角」(図1-①)に見立てた「総角」の名も5点の資料に存在する。また、カシパンは円くて薄いので、円い座布団になぞらえた「円座介」の名も3点の資料にある。

一方,カシパン類の一種ハスノハカシパンは下面に蓮の葉の葉脈に似た溝が見えるが、その模様に由来する「蓮葉介」(ハスノハカイ)の図と名は『文会録』(資料14,1760年)に現われ、計9点の資料に記されている。もっとも、いまのハスノハカシパンだけを指した場合もあるが、カシパン類の総称としても使われており、個々の事例でいずれかを判断するのは難しい。

以上はいずれも殻や全体の形に由来する名であるが、それとは全く異なった「タコ (ノ) マクラ」の名が、『日東魚譜』(資料10、1736年)を初見として、計 6 点の資料に見られる。すでに記したように、江戸時代の「タコノマクラ」はヒトデを指すことが多かったが、ヒトデもカシパンも漢名「海燕」を充てることがあった(→本稿・第 1 節)ので、現ヒトデ(和名タコノマクラ)=漢名「海燕」=現カシパンのように誤った推定をして、カシパンにも和名タコノマクラを充てた可能性がある。

江戸時代には、以上のように多くの呼び方があったが、現在の和名カシパンは明治以降の造語らしく、「相州三浦郡三崎町近傍水産動物採集案内」(資料M7,1890年)に初出する。カシパンは「菓子パン」に由来するのだろうが、現在の「菓子パン」はジャムパンやクリームパンで、ウニのカシパンとはまったく異なった形である。昔の菓子パンがどんな形だったのか、カシパンに似た「甘食」のような菓子を指したのではないかと思うが、まだ答が出ない。

9 スカシカシパンの古名

カシパンの一種で、殻を貫く5個の穴があり、「スカシ」(透し)の語はその穴に由来する。このような珍しい形をしているので認識されたのも早く、『文会録』(資料14,1760年)にすでに図があり、以後もしばしば描かれている。ただし、名称はエンザヒトデ、サルノマクラ、サクラガイ、オコゼノエンザ、オコゼノマクラ、エンコウノマクラ、マンジュウガイなどさまざまで、全国的に共通する名称、とくに多いという名称は無い。「スカシ」のつく方言は「スカシマクラ」として江戸時代末期の『介志』(資料40,1859年以前)になって初めて現われるが、スカシカシパンの名ははるか後の造語らしく、明治期の資料ではまだ見付けていない。大正時代の『動物学提要』(飯島^{いまま}、1918)に見られるのが初出らしい(重井陸夫氏私信)。

10 タコノマクラの古名

江戸時代資料でカシパンは多くの図に描かれているが、現タコノマクラは入手が困難だったのか、本種を取り上げた資料は5例しかない。資料名と記載名を挙げると――

『本草綱目啓蒙』(資料25、1805年): キンツバ (図は無いが、記載から推定)

『諸家虫魚蝦蟹雑記図』(資料35,1841年以前):大文字介(図の初出)

『目八譜』(資料36, 1845年): 亀甲盤, 兜円座 (図アリ)

『介品図証』(資料38, 1855年): キンツバ(図アリ)

『介志』(資料40, 1859年以前):饅頭介、ヤキモチ介(図アリ)

「キンツバ」は菓子の名前。いまのキンツバを上から見ると正方形だが、江戸時代のそれは 刀のツバを模した円形だったので、形がやや楕円で、多少厚みがある現タコノマクラには適切 な命名か。亀甲盤も、全形が亀の甲羅に似ているとして付けた名であろう。「大文字介」は殻 の花紋を「大」の字に見立てた名。「ヤキモチ介」が「焼餅介」なら、やはり形に由来する。

しかし、現タコノマクラにカシパン類を指す「桔梗介・総角・蓮葉介・円座介」の名を用いた例は皆無だし、「タコノマクラ」と呼んだ例も江戸期には現われていない。

11 ブンブク類の古名

ブンブクとは奇妙な和名だが、狸が化けたという分福茶釜(文福茶釜、ブンブクチャガマ)の名が明治期に歪形ウニの一種に充てられ、ついでその仲間が「〇〇ブンブク」と命名されるようになって、総名「ブンブク」(ブンブクウニともいう)が生まれた。

この類は殻が薄くて壊れやすい種類が多いし、砂のなかに潜っていて目につきにくいことも あるからか、江戸時代に描かれた例は下記のとおりで、そう多くない。

『張州雑志』(資料19.1789年):ウニシ.ホロ貝.マボロシ貝(図の初出)

『六百介品』(資料22, 1800年以前):蟹介

『千虫譜』(資料28. 1811年): ネモシヤ介

『博物舘介譜』「岩崎灌園図」(資料30):マンヂウガヒ「饅頭介]

『目八譜』(資料36, 1845年): ネモシヤ, ネモサ, 海ウマ, ナハトリ, ニウトウコ, 海和尚, ウミボウズ, アカボウズ, センコントウ (1項目に多くの方言を集める)

『介志』(資料40, 1859年以前): 蝉介, 蟹介

ブンブク類は左右相称で、やや楕円型。菓子のオハギの形か、後方がやや膨らんだジャガイ モのような形をしていることが多い。上記の名のうち、マンヂウガヒ、海和尚、ウミボウズ、 アカボウズはその形からの名であろうが、それ以外の名の由来は見当がつかない。また、「ブ ンブク」につながる名は上例にまったく現われていない。

じつは、「ブンブクチャガマ」の名を記したウニが、江戸時代にたった1例だが『千虫譜』(資料28, 1811年)に存在する。ところが、それは正形類のガンガゼの図に記された名である。ガンガゼはブンブク類とは縁遠く、細長いトゲをもつウニで、分福茶釜を連想させる姿ではなく、何故その名が付いたのか不明。また、ガンガゼを指す名だったのが、現在のブンブク類に使わ

れるに至った経緯もわからない。ここでは、事実を述べるにとどめておく。

12 ウミユリ・ウミシダ類の古名

序論部分で記したように、ウミユリ類は「茎」をもつ「ウミユリ」と「茎」の無い「ウミシダ」に分かれるが、江戸時代の記録では前者の図あるいは記述に出会っていない。深海産の種類ばかりで稀にしか得られないから、漁民はたまに目にしたかもしれないが、江戸時代の博物家とは無縁だったのだろう。

一方,浅海にも生息する「ウミシダ」類は知られており,表の江戸時代資料では8点を数える。もっとも古い記載は『六百介品』(資料22,1800年以前)の「隠蓑」で,8点のうち5点はこの「カクレミノ」の名を用いている。

また、2点の資料(資料37,41)の呼称は「テンツルモンツル」と「シワ」で、ともにテヅルモヅルの方言が使われているが、『桃洞遺筆』(資料32)の項で触れたように、多少形態が似ていなくもないウミシダとテヅルモヅルを同じ仲間と誤っていた可能性が高い。

ウミシダ類はシダの葉と瓜二つの姿をしているので、それに結びつく方言があるかと思ったが、江戸時代の介譜にそのような例は見当たらなかった。ただ、明治21年(1888)に記された「志摩採集記事」(資料M5)で「ウミシダ」が志麻半島南端に位置する和具での方言として採録されているので、その地では江戸時代にもその名で呼ばれていたかもしれない。ともかく、シダそっくりの姿を表現した「ウミシダ」が以後の和名として定着する。

13 明治時代の和名

江戸時代には、たとえば現ヒトデにタコノマクラ、ヒトデ、モミジガイの3名があったように、同一種に複数の名称が使われることが珍しくなかったが、明治時代に入ると、全国で通用する共通名を一つ選ぶ傾向が強まってくる。その過程で、江戸時代以来の「ウニ、ヒトデ、イトマキヒトデ、ヤツデヒトデ、クモヒトデ、テヅルモヅル」などが生き残り、また、「モミジガイ」などは、ヒトデー般ではなく、現モミジガイを指すように変わっていく。

一方では、「ウミユリ」「カシパン」のように造語されたり(資料 $M3 \cdot M7$)、「ウミシダ」など新たに採用された名称もある(資料M5)。そして、『[中等教育] 動物学教科書』(資料M8、1890年)などの教科書や、学会誌である『動物学雑誌』(1888年創刊)を通じて、全国的に共通名が広まっていったように思われる。

明治20年代末から30年代にかけては、ガンガゼ、ムラサキウニ、バフンウニ、アカヒトデなど、個々の種の和名が定まってくるが、これらは江戸時代の名をそのまま引き継いだのではなさそうである。たとえば「赤ヒトデ」は江戸時代の記録に散発的に現われるが、広く使われた形跡は無い。「馬糞ガゼ」の名は古く18世紀前半の『享保元文産物帳』の一つ『対州并田代産物記録』(対馬藩)に見られる(資料11注①)が、以後の江戸時代資料では資料26に「ムマクソガゼ」(ムマ=ウマ:現アカウニを指す?)がただ1例登場するだけである。また、ガンガゼやムラサキウニの名には、江戸時代資料で出会っていない。これらの和名は、新たに造語し

たり、漁民のあいだに伝わっていた名を拾い上げたりして再登場したように思われる。

14 タコノマクラ考

最後に、そもそもの出発点となった「タコノマクラ」名の変遷をまとめておく。

すでに記したように、江戸時代の「タコノマクラ」はいろいろな種類を指していたが、それ ぞれの場合の初出例、用例数をまとめると次のようになる。

区分	初出資料名	用例数
①ヒトデ類を指した例	訓蒙図彙(資料4,1666年)	12
②クモヒトデ類を指した例	豆州諸島物産図説(資料20, 1791年)	2
③カシパン類を指した例	日東魚譜(資料10, 1736年)	6
④タコノマクラを指した例	ナシ	0

つまり、江戸時代の「タコノマクラ」は、①ヒトデ類、②クモヒトデ類、③カシパン類を指す3通りの使い方があった。一方、現タコノマクラ(属名Clypeaster)を指す用例はこれまで発見できず、おそらく江戸時代には現われなかったと考えられる。

第5節に記したように、②はヒトデとクモヒトデを区別せず、5本の腕をもつ種類を「タコノマクラ」と呼んだのではないかと思われるし、③は漢名の混乱に基く誤用に由来する可能性が高い(第8節)。そのような経緯はともかく、「タコノマクラ」がヒトデを指す使い方(資料M3)、クモヒトデを指す使い方(資料M5)、カシパンを指す使い方(資料M1)の3通りは、明治時代に入っても健在だった。

そのような混乱状態が続いているところへ、『普通動物学』(資料M2, 1883年)に「海盤車〈タコノマクラ〉Clypeaster subdepressus, 其体円クシテ車輪形ヲ呈ス」との記述が現われる。Clypeaster subdepressus はカリブ海産なので、上の記述は洋書に由来するが、この種類はカシパン類と同じく円に近い形をしており、花紋も似るので、図からカシパンの仲間と判断してその古名の一つ「タコノマクラ」を充てたのではないだろうか。

その後、上記の使い方が『[中等教育] 動物学教科書』(資料M8、1890年)に受け継がれ、日本産のClypeaster japonicus(やや楕円形、図1-⑥)の和名に「タコノマクラ」が使われた。この教科書の著者は飯島 魁東大教授で、当時一二を争う研究者であったから、同書は多くの人々に愛用された。したがって、そこに示された和名が全国に広まり、定着していったのは当然の話であった。現に、それ以降はClypeasterにタコノマクラの和名を充てた事例が資料M10、12、15と続いている。そして、「Clypeaster=タコノマクラ」が定着するとともに、ヒトデ、クモヒトデ、カシパンの類に「タコノマクラ」を充てる使い方は跡を絶った。

謝辞

本稿を記すにあたって、重井陸夫京都工芸繊維大学名誉教授にいろいろと御教示をいただきました。心から御礼を申しあげます。

表 ウニ・ヒトデ類の古名

- (1) 資料は年代順に配列したが、年代に関係なく同一著者の著作を続けた場合もある。
- (2) 大半は図を伴う資料を用いたが、図は無くとも記述から同定できる資料(*を付した)も含まれている。各資料には、「資料名、著編者、刊年・成立年(それが不明の場合は著編者の没年以前とした)、所蔵館あるいは影印本・翻刻本の出版社」を記してある。『六百介品』や『千虫譜』のように複数の筆写本が存在する場合は、出来るだけ多くの本を調べているが、表には私が見たうちの最良本だけを示した。「国会」は国立国会図書館、「東博」は東京国立博物館の略、「自筆本」と記さない場合は転写本である。
- (3) ①②……は注記で、資料ごとに示してある。波線を付したのは主要和名の初出例。
- (4) 正形ウニの殻を指す「カブトガイ」や「ホシカブト」, 歪形ウニの口器を呼ぶ「花筐」(ハナカタミ)などの名称は除外した。
- (5) 江戸時代の図譜には、先行資料の転写図が少なからず含まれるが、すべての図を比較することは不可能なので、特別な事例以外は転写関係などに触れなかった。
- (6) 「ヒトデ」は類名。明治期の文献で、Asterias amurensisであることが確実な場合に限り、 種名「マヒトデ」を用いた。また、「ウニ」は正形ウニ類を指す。

番号	記載名		現類名(一部は種名	注記(和名・図の
	漢名	和名	を記す)	初出など)
(1)	『本草和名	』*,深根輔仁,918頃,現代思潮社((影印本)	
001	石陰子	加世 [かせ]	ウニ	
002	霊蠃子	宇爾 [うに]	ウニ	
(2)	『和名類聚	[抄』*,源 順,931~935頃,風間書房	(影印本)	
003	石陰子	加世 [かせ]	ウニ	1
004	霊蠃子	宇邇 [うに]	ウニ	2
	①「石陰	子(漢語抄云,甲蠃,加世)」		
	②「霊蠃	子(漢語抄云,棘甲蠃,字邇),貌似宀	橘而円,其甲紫色,生	些角者 ^一 也」
(3)	『本草原始	🔐 李 中立,1612明本刊・1657和刻本	云刊,国会蔵和刻本:海燕	英図と海盤車
	図は, と	もにヒトデを描いている。これが,漢	名混乱の原因の一つとな	った。
005	海燕		ヒトデ	
006	海盤車		ヒトデ	
007	海胆		ウニ	
(4)	『訓蒙図彙	』,中村惕斎,1666刊,国会		
800	海燕	たこのまくら [蛸の枕]	ヒトデ	名と図の初出:①
009	海胆	うに	ウニ	
	①辞書『	合類節用集』(1680刊)にも「タコノヤ	マクラ」はあるが,「ヒト	デ」は無い。
(5)	『百介図』	:『貝茂塩草』(渡辺主税,1741成,国	会)に所収,17世紀後半	成?
010		桔梗介	カシパン	名と図の初出
(6)	『追補介図]』:『貝尽浦之錦』(大枝流芳,1751刊	, 国会) に所収, 17世紀	後半成?
011	海燕	しほで [塩手?]	ヒトデ	
012	海燕	たこまくら	ヒトデ	

(7)				
(7)		』,吉文字屋浄貞,1690頃成,杏雨書		
013	海燕		ヒトデ	t o truli . O
014		総角〈アゲマキ〉	カシパン	名の初出:①
		ン類の上面にある花紋を、家紋の「総	用」(図Ⅰ一①)に見立っ	くたと思われる。
(8)		草』*,貝原益軒,1709刊,国会		
015	海燕		イトマキヒトデ	図アリ:図の初出
016	海胆	ウニ	ウニ	図ナシ
017	海胆	カセ:ウニの殻を指す	ウニ	図ナシ
(9)		· 図会』,寺島良安,1713刊,国会		
018	海燕	餅貝	カシパン	
019	陽遂足	蛸の枕	ヒトデ	
020	霊蠃子	海栗 [うみくり]	ウニ	
021	霊蠃子	宇仁 [うに]	ウニ	
022		乃称 [のね] (奥州)	ウニ	
(10)		曾』,神田玄泉,1736序,自筆本,内閣)異なる4本があるが,
		っとも優れている享保21年自筆本の記		
023		ヒトデ(参州)	ヒトデ	名の初出
024	陽遂足		ヒトデ	
025	海燕	タコマクラ	カシパン	
026	海燕	ボタンカサ	カシパン	
027	海胆	ウミクリ [海栗]	ウニ	
(11)	『享保元文	て産物帳』,1735~38,国会ほか:『享任	R元文諸国産物帳』(影印	本,科学書院,1985~
	2003) &	利用:①		
028		<u>おふじ</u> の <u>せなかあて</u> [おふじ=お	イトマキヒトデ	盛岡領御書上産物之
		おじ=老人]		内御不審物図
029		わくのて	モミジガイ	越中産物之内絵形:
				図の初出
030		このかす	モミジガイ	筑前国産物絵図帳
031		ムマノコ	ウニ	長門国産物之内絵形
032		海たれ	ウニ	薩摩国産物絵図帳
032A		人うに	ガンガゼ?	薩摩国産物絵図帳
033		ガヂツカイ	ウニ?	尼崎図上:②
034		ネビシヤ(尼崎)	ウニ?	尼崎図上
035		銭ノ <u>フタ</u> (賀州)	カシパン	尼崎図上
036		サクラガイ	カシパン	尼崎図上
037		ツムノハ (尼崎)	カシパン	尼崎図上
038		モミヂハリ (賀州)	ヒトデ	尼崎図上
039		ヲニヒトデ	ヒトデ	尼崎図上
040		シラヒトデ[白人手]	ヒトデ	尼崎図上
	①ここに	示した例は,図によって同定が可能な	ものである。これ以外に	,図を伴わないので現
	在のど	の種に当たるか特定できないが,「ウ	ニ,ガゼ,ウミクリ,タ	'コノマクラ, ヒトデ」
	の既出	名のほか,「シワヒトデ,イトマキ,	イトマキヒトデ, ヨツテ	デ,五ツ手,ゼニガイ,
		,馬糞ガゼ」などの新出名が見られる		
	②「図上」	は「書上」と同じ用法であって,「上	巻」の意味ではない。	

(12)	『越後名告	F』*,丸山元純,1756序,越佐叢書16,	野島出版 (翻刻)	
041	霊螺子	ウニ	ウニ	
042	霊螺子	ガゼ(越後)	ウニ	
043	陽遂足	タコノマクラ	ヒトデ	
044	海燕	餅貝	カシパン	
(13)	『怡顔斎介	↑品』,松岡玄達,1740序・1758刊,国		
045	海燕		モミジガイ	図部
046	海盤車		テヅルモヅル	図部:図の初出
047		蛸枕	カシパン	図部
048	海胆	ウニ	ウニ	説部(以下, 図ナシ)
049	海胆	ヲキノクワンス(阿波)	ウニ	説部:①
050	海胆	カゼ貝(佐渡)	ウニ	説部
051	海胆	シホチカゼ(遠州荒井)	ウニ	説部
052	海燕	章魚枕〈タコマクラ〉	ヒトデ	説部
053	海燕	人手 (相馬)	ヒトデ	説部
054	海燕	手クサリ (敦賀小浜)	ヒトデ	説部
055	海盤車	盲亀ノ浮木	カシパン	説部
056	海盤車	円座シト手	カシパン	説部
	①「クワン	ノス」については、資料26注②を参照		
(14)	『文会録』,	,戸田旭山,1760刊,国会:大坂の薬	品会(動植物の展示会)	の記録
057	海盤車	ヱンザヒトデ[円座人手]	スカシカシパン	図の初出
058	海盤車	サクラカイ	カシパン	
059	海盤車	ハスノハカイ	カシパン	名の初出:①
		ハカシパンの下面にある溝(輻溝)が		
		名が生まれたが,江戸時代にはカシパ	ン類の総名として「蓮葉	介」を用いた場合が多
		に思われる。		
(15)		斧』*,斎藤憲純,1776序,杏雨書屋:①		
060		タコノマクラ	ヒトデ	
061	海盤車		ヒトデ	
062		シワヒトデ(摂州岸和田)		名の初出
063		ウミワラビ (摂州岸和田)		
		文:「本草原始に図ス綱目介部ノ海燕,		
		尺許, 五岐毎頭又細岐多ク, 蕨芽ノ叢		
		デ或ハ <u>ウミワラビ</u> ト云フ」(『本草原始	』には、ヒトデの凶だけ	が描かれている)→次
	資料注			
(16)		遺』*,斎藤憲純,成立年不明,内閣文庫		
064		タコノマクラ	ヒトデ	
065	陽遂足		ヒトデ	
066		ヲニヒトデ:色、赤者	アカヒトデ?	
067		シラヒトデ・色,白者	ヒトデ	
068		ハスノハガヒ	カシパン	
069		ヤキモチガヒ[焼餅介か]		\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\
		文:「陽遂足,即海盤車,俗名タコノマ		
	色赤者	ヲ <u>ヲニヒトデ</u> ト云,白者ヲ <u>シラヒトデ</u>	ト云。トモニ、形状、本	早原始,凶スル所ノ者

ト合ス (➡前項注①)。其甲ヲ海燕ト名ヅク。俗名ハスノガガヒ,又名ヤキモチガヒ,大キサー寸余,色白背上五岐ノ花文アリ。故ニ,ハスノハガヒト云」(カシパンをヒトデの甲と誤解したらしい)

	誤解し7	きらしい)		
(17)	『松前志』*	',松前広長,1781序,国会		
070	海胆	カゼ(蝦夷での和名)	ウニ	1
071	海胆	海栗 (蝦夷での和名)	ウニ	
072	海胆	ロノネ(仙台)	ウニ	
073	海胆	ニノ(蝦夷)	ウニ	
	①「マカゼ	,イヌカゼの二種あり」という。		
(18)	『七島巡見	志』(1782成)由来の図:『伊豆海島原	土記』(国会)より	
074		イラカヂ	バフンウニ類?	1)
075		イソザル [磯笊か]	ジンガサウニ?	1
	①『七島巡	見志』には成立時に動植物の図が付属	貫していたが、動物の分 に	は失われている。一方,
	『伊豆海	喜風土記』の動植物図のうち,植物に	は『七島巡見志』からの!	転写なので、その動物
	図も同る	本からの転写と思われる。		
(19)	『張州雑志	』,巻10,内藤東圃著・赤林信定編,	1789成,愛知県郷土資料	刊行会(影印)
076	海胆	ウニ	ウニ	
077	海胆	ガゼ (尾張)	ウニ	
078		赤ガゼ:紫色,長棘	ムラサキウニ?	
079		黒ガゼ、ガザ(三河)	ウニ	
080		ウニシ	ブンブク	図の初出
081		ホロ貝	ブンブク	
082		マボロシ貝	ブンブク	
(20)	『豆州諸島	物産図説』,田村西湖ほか,1791成,	内閣文庫	
083	海胆	イガガイ [毬介]	ウニ	
084	海燕	キキヤウガイ [桔梗介]	モミジガイ	
085	海燕	キキヤウガイ	イトマキヒトデ	
086	海盤車	タコマクラ	クモヒトデ	図の初出
087	海盤車	キコリダコ(八丈島)	クモヒトデ	
(21)	『東夷物産	志稿』*,土岐新甫,1799成,国会		
088	陽遂足	ウタカラリユ, ウタカラゲ	ヒトデ	アイヌ語
089	陽遂足	紅葉人手	ヒトデ	
090	海燕	にしき人手	ヒトデ	
091	海胆	ニノ	ウニ	アイヌ語
092	海胆	クンネニノ:紫黒色	ムラサキウニ類?	アイヌ語
093	海胆	ガゼ(松前):白者	ウニ	
094	海胆	ネナ (松前):紫黒色	ムラサキウニ類?	
(22)	『六百介品	』,紀伊藩で1800頃までに成立,国会		
095	海燕	章魚枕	ヒトデ	
096	海燕	塩手	ヒトデ	1
097	海燕	手クサリ (敦賀小浜)	ヒトデ	1
098	海燕	桔梗介	カシパン	
099	海燕	円坐介	カシパン	1
100	海燕	総角〈あげまき〉	カシパン	①

		3 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7		(1) (1)
101	海胆	伊賀栗	ウニ	
102		蟹介	ブンブク?	
103		隠蓑[カクレミノ]	ウミシダ	名と図の初出
	①『六百月	は品図説』(国会)で補足。		., ,, ,, ,, ,, ,, ,, ,, ,, ,, ,, ,, ,, ,
(23)		音』,木村蒹葭堂,1802以前,自筆本		
()	分影印本		, , , , , , , , , , , , , , , , , , , ,	
104		ヒトテ	ヒトデ	
105		シヲテ(房州)	ヒトデ	
106		タコマクラ(房州)	ヒトデ	
107		イトマキ [糸巻]	イトマキヒトデ	名の初出:①
108		ハスノハ (京都)	カシパン	
109		アケマキ [総角]	カシパン	
110		エンサ介 [円座介]	カシパン	
111		雨夜ノ星介	マメウニ?	
112		マホロシ [マボロシか]	マメウニ?	
	①資料11	注①を参照。		
(24)	『蒹葭堂雑	望録』,木村蒹葭堂,1802以前成・18	859刊,国会	
113		つみ貝(紡錘貝)	スカシカシパン	表裏の図あり
(25)	『本草綱目	引啓蒙』(初版)*,小野蘭山,1805F	川, 国会:図は無いが, 言	 己述が詳しい。
114	海燕	タコマクラ	カシパン	1
115	海燕	タコノマクラ(佐州)	カシパン	
116	海燕	アゲマキ (紀州)	カシパン	
117	海燕	ハスノハガヒ	カシパン	
118	海燕	テングノツメガヒ(阿州)	カシパン	
119	海燕	セピタ(江戸)	カシパン	
120	海燕	<u>ガハタラウ</u> ノ <u>コマ</u> (泉州)	カシパン	ガハタラウ=河童
121	海燕	ツムノハ (摂州)	カシパン	
122	海燕	ゼニノフタ (加州)	カシパン	
123	海燕	タコノヱンザ(加州)	カシパン	
124	海燕	カブトヱンザ(加州)	カシパン	
125	海燕	サクラガヒ(仙台)	カシパン	
126	海燕	カツパノシリカケ(仙台)	カシパン	
127	海燕	サルノマクラ(予州)	スカシカシパン	2
128	海燕	サクラガヒ(土州)	スカシカシパン	
129	海燕	ヲコゼノマクラ(備前)	スカシカシパン	
130	海燕	キンツバ (予州)	タコノマクラ	名の初出:③
131	陽遂足	クモヒトデ	クモヒトデ	名の初出:④
132	陽遂足	カクレミノ(紀州)	ウミシダ	(5)
133	海盤車	イトマキヒトデ	イトマキヒトデ	6
134	海盤車	リウグウノイトマキ(筑前)	イトマキヒトデ	10
135	海盤車	ヒトデ, シトデ	ヒトデ	710
136	海盤車	シヲデ (阿州)	ヒトデ	
137	海盤車	ヲコゼノマクラ(讃州)	ヒトデ	
138	海盤車	ヨツデ(防州)	ヒトデ	
139	海盤車	ヤツデ (予州)	ヒトデ	名の初出:⑩

140	海盤車	シラヒトデ(白色)	ヒトデ	
141	海盤車	オニヒトデ(摂州)	ヒトデ	
142	海盤車	モミヂガヒ(加州)	ヒトデ	名の初出
143	海盤車	ベニヒトデ(赤色)	アカヒトデ	8
144	海盤車	シハヒトデ(紀州)	テヅルモヅル	9
145	海盤車	シハ (阿州)	テヅルモヅル	
146	海盤車	マツダコ(紀州)	テヅルモヅル	
147	海盤車	ガラコ(予州)	テヅルモヅル	
148	海盤車	ホネツギ (肥前・筑前)	テヅルモヅル	
149	海盤車	テヅルモヅル (摂州)	テヅルモヅル	名の初出
150	海盤車	テンツクモンツク (摂州)	テヅルモヅル	
151	海盤車	テンズモンズル (摂州)	テヅルモヅル	
152	海盤車	テンバ (摂州)	テヅルモヅル	
153	海盤車	デンパチ (予州)	テヅルモヅル	
154	海盤車	シヤグマ (淡州)	テヅルモヅル	
155	海盤車	ツナツカミ(肥前)	テヅルモヅル	
156	海盤車	ノヅカミ(讃州),ノウツカミ	テヅルモヅル	
157	海盤車	ナルカシラ(房州)	テヅルモヅル	
158	海盤車	バンシヤガヒ(尾州)	テヅルモヅル	

- ①「其形正円ニシテ扁……大サ四五分ヨリ二三寸ニ至ル。面ハ中央微ク隆起シテ紋アリ,五出 ノ桜花ノ如シ。腹ハ平ニシテ,荷葉ノ紋脈アリ。中央ニーノ小孔アリ,其口ナリ」
- ②「一種,正円ニシテ扁ク,大サ五七寸,面ハ微高ク,腹ハ正平ニシテ,辺ニ五ノ長孔アリテ面ニ通ズ。中央ニー小孔アリ。内ニ蝶形ノ小骨「ウニノ歯」アリ」
- ③「一種、体厚クシテ……大サ二寸許、面ハ凸ニ、腹ハ凹ニシテ五ノ溝道アリ」
- ④「一種、体小ニシテ、五ノ細長足アル者ヲ<u>クモヒトデ</u>ト云。足ニ軟刺アル者モアリ。是、陽 遂足ナリ」
- ⑤「一種、体ニ短岐ヲ分チ、九ノ長足アル者アリ。紀州ニテ<u>カクレミノ</u>ト云」(『六百介品』には、9本の腕(巻枝)をもつウミシダ(記載名、隠蓑)が描かれている。蘭山の記載はこの図に基くと思われる)
- ⑥「形扁ク, 五角アリテ, 桔梗花弁ノ状ノ如シ。大サー二三寸, 面ハ微ク隆起ス。青クシテ藍色ノ如クナル者アリ, 黄褐色ナル者アリ, 並ニ丹色ノ斑点アリ。腹ハ平ニシテ丹色, 五角ゴトニ溝アリ。中央ニロアリ。ロヲ環リテ小足多クシテ毛ノ如シ。海中ニテハ微ク蠕動ス。生ル時ハ, 体軟ニシテ骨ナシ」
- ⑦「一種, 五枝ニ深ク分レテ, 枝ゴトニ末尖リ, 長サ各二三寸ニシテ槭樹葉ノ形ノ如クナルアリ。 俗ニヒトデト呼, 或ハシトデト云。……皆背ニ軟刺多クシテ, 足ノ如シ」
- ⑧蘭山の天明4~5年(1784~85)の講義では、「龍宮ノ糸マキ」のほかに「シラヒトデ、アカヒトデ」の2品があると述べている(本草綱目会識、東博)。これが「アカヒトデ」の語の初出であり、現在のアカヒトデを指していると考えてよいだろう。
- ⑨「面背倶ニ軟刺アリテ,七枝八枝九枝ナル者アリ。……形円扁,大サー寸許,菊花ノ形アリ[中央の「盤」のこと]。周囲ニ足多シ。足ニ横紋アリ。足ゴトニ枝ヲ分チ,枝ゴトニ叉ヲ分チテ数十叉ニ至リ,皆巻曲ス。松蘿ノ状ニ似テ,フトシ」
- ⑩『小野蘭山公勤日記』(国会)の享和3年(1803)4月2日条の阿波国小湊での採集を記した個所に「カイデ(割注,ヒトデ)」「ヨツデ(ビクニヒトデトモ云,リウグウノイトマキ也)」「ヤツデ(丹紅色八岐)」とある。「ヨツデ」はイトマキヒトデであり、また「ヤツデ」はヤツデヒトデの名の初出。「カイデ」はこの資料にしか見えないが、カエデ(楓)に由来する名称と

思われる。

	74.12	• 0			
(26)	「南楼随筆	』*, 小野蘭山, 1788成, 自筆本,	東洋文庫:①		
159	海胆	ガゼ (仙台), カゼ (三河)	ウニ		
160	海胆	イガ (備前宮津)	ウニ		
161	海胆	ヲコゼノクハンス(姫路)	ウニ	2	
162	海胆	ドモリクハンス(土佐羽根浦)	ウニ	2	
163	海胆	ムマクソガゼ(筑前):褐刺	アカウニ?		
164	海胆	カゼ(松前):黄細刺	ウニ		
165	海胆	ノナ (松前): 黒粗刺	ムラサキウニ類?		
	① > の	には米げているウェの古書の士坐	は 安容料 で「海燕」 頂の	古谷に討されており	-

- ①この著作に挙げているウニの方言の大半は次資料で「海燕」項の直後に記されており、ウニ はヒトデやカシパンに近い種類であると蘭山が考えていたことを示す。しかし、何故か『本 草綱目啓蒙』ではウニに言及していない。
- ②「クハンス」(クヮンス、カンス) =鑵子=茶釜:普通のウニは半球型なので、それを茶釜に 見立てたのだろう。
- 『本草綱目草稿』*、小野蘭山、1810以前、講義用覚え書の自筆本、国会:資料25『本草綱目啓蒙』 (27)に記す方言の大半が記されているが、下記はそれ以外の例である。

166		エンコウノマクラ(松山)	スカシカシパン	エンコウ=猿猴
167		コボシノサラ(勢州)	カシパン	
168	海盤車	ウミセニ [海銭か]	カシパン	
169		ワシノテ介(越後小千谷)	ヒトデ:白色	
170	陽遂足	ヘビノフクロゴ	クモヒトデ	

- (28)「千虫譜』, 栗本丹洲, 1811序, 国会:名称は先行書からの転写が少なくない。:①
- 171 海燕 ウミグモ (蝦夷産) ヒトデ 172 海燕 紅葉介 (蝦夷産) ヒトデ 173 海燕 ウミモミヂ (蝦夷産) ヒトデ 174 海燕 ウタカラリコ (蝦夷シキウ) ヒトデ ヒトデガイ(蝦夷ヱトモ) 175 イトマキヒトデ 176 イトマキ (越中魚名浦) 海燕 イトマキヒトデ 177 クモダコ (石州浜田) クモヒトデ 178 海燕 テヅルモヅル (摂州兵庫) テヅルモヅル
- 179 海燕 テンツルモンツル (摂州兵庫) テヅルモヅル テンツクモンツク (摂州兵庫) テヅルモヅル 180 海燕 181 海燕 ノウツカミ (肥前) テヅルモヅル 182 海燕 ノヅカミ (讃州) テヅルモヅル 183 海燕 ツナツカミ (肥前五島) テヅルモヅル
- 184 海燕 デンハチ (伊予) テヅルモヅル 185 海燕 テンバ (淡路) テヅルモヅル 186 海燕 ガラコ (伊予) テヅルモヅル
- 187 海燕 ホネツギ (筑前) テヅルモヅル
- シヤグマ (淡路) テヅルモヅル 188 海燕 189 海燕 シワ (阿波) テヅルモヅル
- 190 海燕 シワヒトデ (紀州熊野) テヅルモヅル 191 海燕 マツダコ (紀州) テヅルモヅル
- ハナダコ (佐州) テヅルモヅル 192 海燕
- 193 バンジヤガイ「盤車介」(尾州) スカシカシパン 海盤車

194 海盤車 桔梗貝 スカシカシパン 195 海胆 ノナ (蝦夷, 原地名) ウニ ウニ 196 海胆 ガゼ (蝦夷, 和名) 197 海胆 ブンブクチヤガマ (石州浜田) ガンガゼ 名の初出 198 海盤車 ネモシヤ介 (神奈川) ブンブク ①『千虫譜』の原本は火災で失われたが、多数の転写本が残る。ただし、書名が『栗氏千虫譜』 『栗氏虫譜』『丹洲虫譜』……とさまざまな上に、内容・配列・転写図の巧拙などが写本によっ てかなり異なる。ここでは、博物画の名手服部雪斎が原本から転写した最良の資料を用いた。 ②『アンボイナ珍品集成』(D'Amboinische rariteitkamer: 当時はラリテートと称した) から 転写したブンブクの一種の図に付された注記に、「神奈川海にネモシヤ介と云あり……殻薄 く、破砕し易し」と記されている。 『栗氏魚譜』, 栗本丹洲, 1834以前, 国会伊藤文庫 (29)199 海盤車 ガザイタコ(羽州飛島) クモヒトデ 巻20 200 クモヒトデ 巻5:① わくのて 201 いとまき イトマキヒトデ 巻5:① ①高松藩主松平頼恭編『衆鱗図』(影印本, 第三帖, 香川県歴史博物舘友の会, 2003年) 中の 図の転写。原図には名称を記していないので、記載名は丹洲の補足と思われる。 『博物舘介譜』 博物局編 1877頃 東博: 江戸時代の介図資料を切り抜いて、貼付してある。 (30)幕医栗本丹洲や、幕臣岩崎灌園の資料が含まれている。 202 海盤車 タコマクラ カシパン 栗本丹洲画 203 海燕 ヒトデ タコマクラ 栗本丹洲画 204 海燕 青ヒトデ ヒトデ 栗本丹洲画 205 海燕 白ヒトデ ヒトデ 栗本丹洲画 イツツデ「五つ手】 206 海燕 ヒトデ 栗本丹洲画 207 イトマキヒトデ 海盤車 龍宮ノイトマキ 栗本丹洲画 海盤車 イトマキヒトデ 208 イトマキヒトデ 栗本丹洲画 209 陽遂足 クモヒトデ 栗本丹洲画:① 210 海燕 ウミシダ 栗本丹洲画:① マンヂウガヒ「饅頭介] ブンブク 211 岩崎灌園画: 名初出 ①高松藩主松平頼恭編『衆鱗図』(文献29注①)からの転写図だが、漢名は丹洲による。 (31)『甲子夜話』初編・巻22-項16、松浦静山、1821起筆、平凡社東洋文庫:① 212 カセ、ガセ、ガゼ ウニ 石陰子 トゲが短い 213 石陰子 女ウニ〈メウニ〉 ウニ トゲが短い 214 棘甲蠃 ウニ ウニ トゲが長い ウニ 215 トゲが長い 棘甲蠃 海栗 ①『和名類聚抄』(資料2)の「霊蠃子(漢語抄云,棘甲蠃字仁)……甲紫色、生芒角者也」の 文を引き、ウニはトゲの長い品、カセはトゲの短い品を指すと述べている。 『桃洞遺筆』(巻3、手蔓藻蔓)小原桃洞、1833刊、国会:図はオオウミシダであるが、本文で (32)はテヅルモヅルについて記すので、本項はテヅルモヅルの呼称例に含めた。テヅルモヅルはク モヒトデ類、オオウミシダはウミユリ類で、縁遠い種類だが、腕が多いなどの点が類似してお り、江戸時代には両者を混同していた場合があるらしい。なお、本資料での紀伊以外の方言は、

先行書の写しが多い。216海盤車手蔓藻蔓〈てづるもづる〉デヅルモヅル①217海盤車テンズモンズ (紀州熊野)デヅルモヅル218海盤車天蔓藻 (紀州和歌山)デヅルモヅル

219	海盤車	手蔓藻 (摂州)	テヅルモヅル	
220	海盤車	テンズモンヅル(摂州)	テヅルモヅル	
221	海盤車	テンツクモンツク(摂州)	テヅルモヅル	
222	海盤車	テンバ (摂州)	テヅルモヅル	
223	海盤車	デンパチ (予州)	テヅルモヅル	
224	海盤車	海牡丹	テヅルモヅル	
225	海盤車	シワヒトデ(紀州熊野)	テヅルモヅル	
226	海盤車	シウ (阿州)	テヅルモヅル	シワの誤刻か
227	海盤車	シヤグマ(紀州日比浦)	テヅルモヅル	
228	海盤車	シヤシヤラシヤグマ(紀州加太浦)	テヅルモヅル	
229	海盤車	シヤシヤシヤラ	テヅルモヅル	
230	海盤車	ガラコ (予州)	テヅルモヅル	
231	海盤車	マツダコ (紀州熊野)	テヅルモヅル	
232	海盤車	ハナダコ	テヅルモヅル	
233	海盤車	ツナツカミ(肥前)	テヅルモヅル	
234	海盤車	ノヅカミ(讃州)	テヅルモヅル	
235	海盤車	ノウヅカミ	テヅルモヅル	
236	海盤車	ホネツギ(肥前,筑前)	テヅルモヅル	
237	海盤車	ナルカシラ(房州)	テヅルモヅル	
238	海盤車	バンシヤガヒ(尾州)[盤車介]	テヅルモヅル	
	①「『橘菴》	漫筆』二編[嗚呼牟草]によると,事:	が多端で繁く、衆議がま	ちまちで話が決まらな
	い場合	を,手づるもづるという」旨が記されて	ている。	
(33)	『甲介群分	↑品彙』,武蔵石寿編,1836序,国会:	 資料22『六百介品』を改	 !訂した著作。
239	海胆	伊賀栗	ムラサキウニ	110
239 240	海胆			
		伊賀栗	ムラサキウニ	,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,
240		伊賀栗 桔梗介	ムラサキウニ カシパン	
240 241	 	伊賀栗 桔梗介 章魚枕	ムラサキウニ カシパン ヒトデ	
240 241 242	 	伊賀栗 桔梗介 章魚枕 隠養	ムラサキウニ カシパン ヒトデ	
240 241 242 (34)	 	伊賀栗 桔梗介 章魚枕 隠蓑 ⁸ 』,毛利梅園,1839序,自筆本,国会	ムラサキウニ カシパン ヒトデ ウミシダ	
240 241 242 (34) 243	 『梅園介語	伊賀栗 桔梗介 章魚枕 隠蓑 ^第 』,毛利梅園,1839序,自筆本,国会 紅葉貝〈モミヂガイ〉	ムラサキウニ カシパン ヒトデ ウミシダ モミジガイ	
240 241 242 (34) 243 244	 『梅園介譜 	伊賀栗 桔梗介 章魚枕 隠蓑 ⁴ 』, 毛利梅園, 1839序, 自筆本, 国会 紅葉貝〈モミヂガイ〉 ヲニヒトデ(兵庫)	ムラサキウニ カシパン ヒトデ ウミシダ モミジガイ モミジガイ	
240 241 242 (34) 243 244 245	『梅園介譜	伊賀栗 桔梗介 章魚枕 隠蓑 ^高 』, 毛利梅園, 1839序, 自筆本, 国会 紅葉貝〈モミヂガイ〉 ヲニヒトデ(兵庫) 白ヒトデ	ムラサキウニ カシパン ヒトデ ウミシダ モミジガイ モミジガイ モミジガイ	
240 241 242 (34) 243 244 245 246	『梅園介語 海胆	伊賀栗 桔梗介 章魚枕 隠養 情』, 毛利梅園, 1839序, 自筆本, 国会 紅葉貝〈モミヂガイ〉 ヲニヒトデ(兵庫) 白ヒトデ	ムラサキウニ カシパン ヒトデ ウミシダ モミジガイ モミジガイ モミジガイ ウニ	
240 241 242 (34) 243 244 245 246 247 248	—— —— —— —— —— 海胆 海胆	伊賀栗 桔梗介 章魚枕 隠蓑 動, 毛利梅園, 1839序, 自筆本, 国会 紅葉貝〈モミヂガイ〉 ヲニヒトデ(兵庫) 白ヒトデ ウニ ウニガイ	ムラサキウニ カシパン ヒトデ ウミシダ モミジガイ モミジガイ モミジガイ ウニ ウニ	
240 241 242 (34) 243 244 245 246 247 248	—— —— —— —— —— 海胆 海胆	伊賀栗 桔梗介 章魚枕 隠養 ・ 、毛利梅園、1839序、自筆本、国会 紅葉貝〈モミヂガイ〉 ヲニヒトデ(兵庫) 白ヒトデ ウニ ウニガイ 海栗	ムラサキウニ カシパン ヒトデ ウミシグ モミジガイ モミジガイ モミジガイ ウニ ウニ ウニ	
240 241 242 (34) 243 244 245 246 247 248 249	「梅園介語 「梅園介語 一 海胆 海胆 海胆 海盤車	伊賀栗 桔梗介 章魚枕 隠蓑 fa, 毛利梅園, 1839序, 自筆本, 国会 紅葉貝〈モミヂガイ〉 ヲニヒトデ(兵庫) 白ヒトデ ウニ ウニガイ 海栗 エンザヒトデ	ムラサキウニ カシパン ヒトデ ウミシダ モミジガイ モミジガイ モミジガイ ロニ ウニ ウニ ウニ フン フン	
240 241 242 (34) 243 244 245 246 247 248 249 250	『梅園介語 一海胆 海胆 海盤車 海盤車	伊賀栗 桔梗介 章魚枕 隠蓑 動, 毛利梅園, 1839序, 自筆本, 国会 紅葉貝〈モミヂガイ〉 ヲニヒトデ(兵庫) 白ヒトデ ウニ ウニガイ 海栗 エンザヒトデ タコマクラ	ムラサキウニ カシパン ヒトデ ウミジガイ モミジガイ モミジガイ モニシンガイ ウニ ウニ フノハカシパン ハスノハカシパン	
240 241 242 (34) 243 244 245 246 247 248 249 250 251	『梅園介語 『梅園介語 一海胆胆 海胆胆 華車 海盤 車車	伊賀栗 桔梗介 章魚枕 隠蓑 ・ 毛利梅園, 1839序, 自筆本, 国会 紅葉貝〈モミヂガイ〉 ヲニヒトデ(兵庫) 白ヒトデ ウニ ウニガイ 海栗 エンザヒトデ タコマクラ ハンシヤ貝 [盤車貝] (尾州)	ムラサキウニ カシパア ウミシグ イモミジガイイ モミジガガイ ロニスススス フリカカカシパン ハスノノハカシパン ハススノハス	
240 241 242 (34) 243 244 245 246 247 248 249 250 251 252 253	『梅園介譜 ――――――――――――――――――――――――――――――――――――	伊賀栗 桔梗介 章魚枕 隠蓑 鳥, 毛利梅園, 1839序, 自筆本, 国会 紅葉貝〈モミヂガイ〉 ヲニヒトデ(兵庫) 白ヒトデ ウニ ウニガイ 海栗 ヱンザヒトデ タコマクラ ハンシヤ貝 [盤車貝] (尾州) 桔梗貝 蓮葉貝	ムカナキウニ カシトデ ウトデッグ モモミジガイイイインシップ ガガイイイイイイイイイイイイイイイイイイ カカカカカカカカカカカシパン スススススノノハハハハカシパン	
240 241 242 (34) 243 244 245 246 247 248 249 250 251 252	『梅園介譜 ――――――――――――――――――――――――――――――――――――	伊賀栗 桔梗介 章魚枕 隠蓑 鳥, 毛利梅園, 1839序, 自筆本, 国会 紅葉貝〈モミヂガイ〉 ヲニヒトデ(兵庫) 白ヒトデ ウニ ウニガイ 海栗 ヱンザヒトデ タコマクラ ハンシヤ貝 [盤車貝] (尾州) 桔梗貝 蓮葉貝	ムカナキウニ カシパデ・ヴ トデ・ダ モミジガイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイカカカカカカ	
240 241 242 (34) 243 244 245 246 247 248 249 250 251 252 253 (35)	『梅園 一海海海海海海海海沿部 一海海海海海路 整點 整點 整點 數	伊賀栗 桔梗介 章魚枕 隠蓑 (1), 毛利梅園, 1839序, 自筆本, 国会 紅葉貝〈モミヂガイ〉 ヲニヒトデ(兵庫) 白ヒトデ ウニ ウニガイ 海栗 ヱンザヒトデ タコマクラ ハンシヤ貝 [盤車貝] (尾州) 桔梗貝 蓮葉貝 ** ** ** ** ** ** ** ** ** ** ** ** **	ムラサキウニ カシドデ・ヴ モミジガイイ モミジジガイイイウニスススノノハハカカカカカカカカカカシッパン ハハススノノハカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカカ	
240 241 242 (34) 243 244 245 246 247 248 249 250 251 252 253 (35) 254	『梅園 一海海海海海海海海沿部 一海海海海海路 整點 整點 整點 數	伊賀栗 桔梗介 章魚枕 隠養 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	ムラサキウニ カシパデ ウミ・デッダ モミジガイイ モミジガガイ ウニススススイ ウニスススノノノハハカカカカカカカカカカカカシパパン カンシパンン カンシパンン カンシパンン カンシパン カンシパン カンシパン カンシパン カーニ カーニ カーニ カーニ カーニ カーニ カーニ カーニ カーニ カーニ	
240 241 242 (34) 243 244 245 246 247 248 249 250 251 252 253 (35) 254 255	『梅園 一海海海海海海海海沿部 一海海海海海路 整點 整點 整點 數	伊賀栗 桔梗介章魚枕 隠養 ・ (毛利梅園, 1839序, 自筆本, 国会 紅葉貝〈モミヂガイ〉 ヲニヒトデ(兵庫) 白ヒトデ ウニ ウニガイ 海栗 エンザヒトデ タコマクラ ハンシヤ貝 [盤車貝] (尾州) 桔梗貝 蓮葉貝 ・ (蝦蟹雑記図」, 大窪昌章, 1841以前, ヒトデ ナマコガサ	ムカシトデ ウトデッグ モミジガイイイ モミジガガイ ウニニススススススススススススススススススススススススススススススススススス	
240 241 242 (34) 243 244 245 246 247 248 249 250 251 252 253 (35) 254 255 256		伊賀栗 桔梗介 章魚枕 隠蓑 『、毛利梅園、1839序、自筆本、国会 紅葉貝〈モミヂガイ〉 ヲニヒトデ (兵庫) 白ヒトデ ウニ ウニガイ 海栗 エンザヒトデ タコマシヤ貝 [盤車貝] (尾州) 桔梗貝 蓮葉 !	ムカシトデ ウパデ・ダ モモミジガイイイ・シンパパハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ	

259		ハスノハガヒ	カシパン
260	海燕	ハスノハガヒ	ハスノハカシパン
261		タコマクラ	カシパン
262		ヲコゼノエンザ	スカシカシパン
263		大文字介	タコノマクラ
264	陽遂足	クモヒトデ	クモヒトデ

(36) 『目八譜』, 武蔵石寿, 1845序, 稿本, 国会:大半は実物に基く正確なスケッチだが, 名称は先行書からの転写が多い。転写の際に地名を写し間違えたらしい例があるが, 本表では訂正しなかった。また,「海燕」(ヒトデ)の項にカシパンやテヅルモヅルの方言が多数混入しているが, これはリストから除いた。名称の割注に「海語」と記す例がいくつかあるが, 船乗りや漁師の言葉の意味か, 特定の書物を指すか, 不明。注記は巻番号-品目番号。

265	海胆	ウニ	ウニ	巻12-26
266	海胆	カセ(仙台,佐渡)	ウニ	巻12-26
267	海胆	海栗	ウニ	巻12-26
268	海胆	ヲキノクワンス (阿波, 古名)	ウニ	巻12-26
269	海胆	ブンブクチヤマガ (石州)	ウニ	巻12-26
270	海胆	アキノヌシ (琉球)	ウニ	巻12-26
271	海胆	ガヅツ(琉球,屋久島)	ウニ	巻12-26
272	海胆	ノネ (奥州)	ウニ	巻12-26
273	海胆	ノナ (蝦夷)	ウニ	巻12-26
273A		長刺栗	ガンガゼ	巻12-32:①
274		八丈海丹	パイプウニ	巻12-33:①
275		ネモシヤ(房州),ネモサ(同)	ブンブク	巻13-23:②
276		海ウマ(播州)	ブンブク	巻13-23
277		ナハトリ(佐渡)	ブンブク	巻13-23
278		ニウトウコ (海語)	ブンブク	巻13-23
279		海和尚 (海語)	ブンブク	巻13-23
280		ウミボウズ(海語)	ブンブク	巻13-23
281		アカボウズ(海語)	ブンブク	巻13-23
282		センコントウ(海語)	ブンブク	巻13-23
283		寒菊	マメウニ?	巻13-24
284	海盤車	桔梗介	カシパン	巻14-1:③
285	海盤車	盲亀ノ浮木(筑前)	カシパン	巻14-1
286	海盤車	猿ノ枕	カシパン	巻14-1
287	海盤車	猿猴ノ枕(与州)	カシパン	巻14-1
288	海盤車	蓮葉介	カシパン	巻14-1
289	海盤車	テンバ (兵庫)	カシパン	巻14-1
290	海盤車	アケマキ介 (紀州)	カシパン	巻14- l
291	海盤車	川太郎ノ <u>コマ</u> (紀州)	カシパン	巻14- l
292	海盤車	カツパノ尻カケ(仙台)	カシパン	巻14-1
293	海盤車	ツムノハ(摂州)	カシパン	巻14-1
294	海盤車	セビタ(江州:江戸の誤りか)	カシパン	巻14-1
295	海盤車	サクラ介(土佐)	カシパン	巻l4- l
296	海盤車	キンツハ (与州)	カシパン	巻l4- l
297	海盤車	ヲコセノ枕(備前)	カシパン	巻l4- l

298	海盤車	ゼニノフタ(加州)	カシパン	巻14- 1
299	海盤車	エンサカヒ [円座介]	カシパン	巻14- l
300	海盤車	カフトエンサ (加州)	カシパン	巻14- l
301	海盤車	サクラヱンザ(仙台)	カシパン	巻14- l
302		章魚ノ円座	カシパン	巻14-2
303		モミヂ (相州)	カシパン	巻14-2
304		亀甲盤	タコノマクラ	巻14-3
305		兜円座	タコノマクラ	巻14-4
306		盤車介(尾州)	スカシカシパン	巻14-5
307		サルノマクラ(与州)	スカシカシパン	巻14-5
308		ヲコゼノマクラ(備前)	スカシカシパン	巻14-5
309	海燕	ヒトデ	ヒトデ	巻14-6
310	海燕	シトテ	ヒトデ	巻14-6
311	海燕	章魚枕	ヒトデ	巻14-6
312	海燕	ヤモチ介 (勢州)	ヒトデ	巻14-6
313	海燕	シホテ(阿波)	ヒトデ	巻14-6
314	海燕	カラコ(与州)	ヒトデ	巻14-6
315	海燕	ナマコノカサ	ヒトデ	巻14-6
316	海燕	ヲコセノマクラ(讃州)	ヒトデ	巻14-6
317	海燕	ヨツデ(防州)	ヒトデ	巻14-6
318	海燕	テノヒラ (尼崎)	ヒトデ	巻14-6
319	海燕	イカモチ(播州)	ヒトデ	巻14-6
320	海燕	ウキナマコ (兵庫)	ヒトデ	巻14-6
321	海燕	海紅葉	モミジガイ	巻14-6
322	海燕	モミチ介 (肥州)	モミジガイ	巻14-6
323	海燕	イカモミヂ(播州)	モミジガイ	巻14-6
324		大ノ字	アカヒトデ	巻14-7
325		紅人手	アカヒトデ	巻14-8
326		五ツ手 (安芸)	アカヒトデ	巻14-8
327		車人手	ヤツデヒトデ	巻14-9:④
328		八ツ手	ヤツデヒトデ	巻14-9
329		タコノヱンザ	ヤツデヒトデ	巻14-9
330		綱人手	ヒトデ	巻14-10
331		ウタカラリコ(蝦夷)	ヒトデ	巻14-10
332		<u>カボチヤ</u> ノハナ	ヒトデ	巻14-10
333		鬼人手	ヒトデ	巻14-12
334		刺人手	ヒトデ	巻14-12
335		海クモ	ヒトデ	巻14-12
336		龍宮ノ糸巻	イトマキヒトデ	巻14-13
337		糸巻人手	イトマキヒトデ	巻14-13
338		クモタコ (石州浜田)	クモヒトデ	巻14-14
339		クモヒトテ	クモヒトデ	巻14-14
340	陽遂足	皺人手 (紀州)	テヅルモヅル	巻14-15
341	陽遂足	シワ(阿波)	テヅルモヅル	巻14-15
342	陽遂足	テツルモツル(摂州)	テヅルモヅル	巻14-15

343	陽遂足	テツルモ(摂州)	テヅルモヅル	巻14-15
344	陽遂足	テンツクモンツク (摂州)	テヅルモヅル	巻14-15
345	陽遂足	テンツルモ(和歌山)	テヅルモヅル	巻14-15
346	陽遂足	テンズモンス(摂州)	テヅルモヅル	巻14-15
347	陽遂足	テンズモンツル(摂州)	テヅルモヅル	巻14-15
348	陽遂足	テンパチ(与州), テンバ	テヅルモヅル	巻14-15
349	陽遂足	藻蔓 (房州)	テヅルモヅル	巻14-15
350	陽遂足	シヤクマ(淡州)	テヅルモヅル	巻14-15
351	陽遂足	シヤクマチンバ (淡州)	テヅルモヅル	巻14-15
352	陽遂足	シヤシヤラシヤクマ(紀州加太)	テヅルモヅル	巻14-15
353	陽遂足	シヤシヤラ (摂州)	テヅルモヅル	巻14-15
354	陽遂足	ツナツカミ(肥前五島)	テヅルモヅル	巻14-15
355	陽遂足	ノウツカミ(紀伊)	テヅルモヅル	巻14-15
356	陽遂足	ノツカミ(讃州)	テヅルモヅル	巻14-15
357	陽遂足	マツタコ(紀伊)	テヅルモヅル	巻14-15
358	陽遂足	ハナタコ(佐州)	テヅルモヅル	巻14-15
359	陽遂足	海ボタン (摂州)	テヅルモヅル	巻14-15
360	陽遂足	カラコ(伊予)	テヅルモヅル	巻14-15
361	陽遂足	ナルカシラ(房州)	テヅルモヅル	巻14-15
362	陽遂足	ホネツキ (筑前)	テヅルモヅル	巻14-15
	O # 1. F	WH P P 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	and the second	

- ①栗本丹洲著『千虫譜』からの転写だが、名称は変えている。
- ②オオブンブクのスケッチとブンブクチャガマらしい図が描かれている。
- ③ハスノハカシパン(背側と腹側の図)と、種名不明のカシパン類が描かれている。
- ④「車人手」の項にはヤツデヒトデ1図とウミシダ1図が描かれている。後者は高松藩主松平頼恭編『衆鱗図』中の図(原図に名称なし:→資料29注①)の転写だが、ウミシダの腕が約10本あるので、石寿はヤツデヒトデの類と誤認したのかもしれない。いずれにしても、名称が記されていないので、このウミシダ図は本表には入れていない。
- 『本草図説』, 高木春山, 1852以前, 自筆本, 岩瀬文庫 (37)363 五ノ手 海燕 ヒトデ 364 海燕 たこまくら:2品 クモヒトデ 365 海燕 手蔓藻蔓 (琉球ノ産) テヅルモヅル 366 海燕 テンツルモンツル ウミシダ (1)
 - ①このウミシダの図は、『目八譜』中の図(→資料36注④)と同一の転写図と思われる。なお、このテンツルモンツルを含む多数の方言(本表では他例を省略した)を、『千虫譜』のテヅルモヅルの個所から写している。

(38)	『介品図証	』,西村広休編?,山本榕室・1855写,	岩瀬文庫
367		クモヒトデ	クモヒトデ
368		龍宮ノ糸巻	イトマキヒトデ
369	海盤車	シラヒトデ	モミジガイ
370		ハスノハ介	カシパン
371		ヒノキガサ	ハスノハカシパン
372		オコゼノマクラ	スカシカシパン
373		キンツバ	タコノマクラ
374		カクレミノ	ウミシダ

(39)	『奄美大島	動物図譜』(仮称),名越時行画・田代	安定写,1855頃成:東博蔵『博物舘動物図譜』
	巻5に所り	仅	
375		ガヅツ	ウニ
376		アヅンユン	パイプウニ
377		ヲバガヅツ	アカウニ類?
378		コンガヅツ	ムラサキウニ類?
(40)	『介志』,『	畔田翠山,1859以前,自筆本,東洋文庫	車
379		モミヂバス [紅葉蓮か]	カシパン
380		ハスノ葉介	ハスノハカシパン
381		スカシマクラ	スカシカシパン 「スカシ」の初出
382		饅頭介	タコノマクラ
383		ヤキモチ介	タコノマクラ
384		雨夜ノ里	マメウニ
385		星介	マメウニ
386		蝉介	ブンブク
387		蟹介	ブンブク
388		人手	ヒトデ
389		桔梗介	イトマキヒトデ
390		モミヂ介	モミジガイ
391		陽遂足	クモヒトデ
392		糸人手	クモヒトデ
393		クモヒトデ	クモヒトデ
394		シワ	テヅルモヅル
395		カクレミノ	ウミシダ
(41)	『三千介図]』,畔田翠山,1859以前,杏雨書屋:	前資料『介志』と同じ事例は除いた。
396		マンヂウ介	スカシカシパン
397		赤ヒトデ	アカヒトデ
398		糸マキヒトデ	イトマキヒトデ
399		シワ	ウミシダ

[明治期資料]:代表的著作のみを挙げる,学名は原記載のまま

番号	記載名		現類名(一部は種名	注記(和名・図の
щЗ	漢名	和名・学名	を記す)	初出など)
(M1))『文部新刊	·小学懸図/博物教授書』,巻	6, 田中芳男撰・片山淳吉参解,	1877刊,錦森堂
M01	海胆	ウニ	ウニ	
M02	海燕	タコノマクラ	カシパン	
M03	海燕	ハスノハガヒ	カシパン	
M04	海燕	キキヤウガヒ	カシパン	
M05	海燕	サルノマクラ	スカシカシパン	
M06	海盤車	ヒトデ	ヒトデ	
M07	海盤車	モミヂガヒ	ヒトデ	
M08	海盤車	イトマキヒトデ	イトマキヒトデ	
M09	陽遂足	クモヒトデ	クモヒトデ	

M10	陽遂足	テヅルモヅル	テヅルモヅル	
Mll	陽遂足	シワヒトデ	テヅルモヅル	
(M2)	『普通動物学	学』*,丹波敬三・柴田承桂纂/高松数.	馬補輯,1883刊,丸屋善	<u></u> 七ほか
M12	海胆	ウニ Toxopneustes puratus	ウニの一種	
M13	海胆	ブンブクチヤガマ Diadema setosum	ガンガゼ	1
M14	海胆	八丈海胆 Echinus mamillatus	パイプウニ	図アリ
M15	海盤車	タコノマクラ Clypeaster sub-	タコノマクラの一種	現和名の初出:②
		depressus	(カリブ海産)	
M16	海燕	ヒトデ Asterias	ヒトデ	
M17	海燕	ヲニヒトデ Oreaster	コブヒトデ類?	3
M18	海燕	イトマキヒトデ Asteriscus	イトマキヒトデ	
M19	陽遂足	クモヒトデ Ophiura	クモヒトデ	
M20	陽遂足	シワヒトデ,又テヅルモヅル	テヅルモヅル	
		Astrophyton		
	①#\v#\b	ジなブンブカエロボっしし ものは 『工』	h謎。(姿約90) の引用し	用わわっ

- ①ガンガゼをブンブクチャガマとしたのは、『千虫譜』(資料28)の引用と思われる。
- ②属名 Clypeaster に「タコノマクラ」を充てた最初。説明に「其体円クシテ車輪形ヲ呈ス」とあるので、カシパンの一種と思ってこの和名を用いたらしい。
- ③コブヒトデ類だが、何を指しているのかは不明。

(M3))『生物学語	彙』*,岩川友太郎,1884刊,集英堂:	属名・英名-和名・漢名	
M21	海燕	Asteroidea	ヒトデ	
M22	海燕	タコノマクラ Sea-pad, Star-fish	ヒトデ	1
M23	海盤車	ヒトデ Clypeaster	タコノマクラ	2
M24		イトマキヒトデ Asteriscus	イトマキヒトデ	
M25	陽遂足	クモヒトデ Brittle-star	クモヒトデ	
M26		シハヒトデ Astrophyton	テヅルモヅル	
M27	海胆	ウニ Sea-urchin	ウニ	
M28		ブンブクチャクガマ Diadema	ガンガゼ	3
M29		オニヒトデ Oreaster	コブヒトデ類?	3
M30		海百合 Sea-lily	ウミユリ	名の初出:④
M31		ハナヒトデ Feather-star	ウミシダ	
	(1) ## # C	1)) ((') (') (') (')	n . D ")-	==

- ①英名 Sea-pad は a starfish or five-fingers と "Century Dictionary" に記されている。本資料では、Sea-pad および Star-fishの訳語として、ともに「海燕〈タコノマクラ〉」と記しているので、この場合の「タコノマクラ」はヒトデ類を指す。
- ②Clypeaster について、誤ってヒトデの訳を与えたと思われる。
- ③この2例は、『普通動物学』(資料M2)から採録したらしい。
- ④『生物学語彙』にはSea-lilyの訳語として「海百合(義訳)」とあり、岩川が考案した新訳である。ほかに、「ラッパムシ」や「ワムシ(輪虫)」も「義訳」として、このとき初めて登場し、現在まで使い続けられている。

(M4)	『動物通解』	」,岩川友太郎・佐々木忠次郎,	1885刊,文部省編輯局
M32	海胆	ウニ Strongylocentrotus	ムラサキウニ?
M33	海盤車	ヒトデ Asterias	マヒトデ
M34	海燕	イトマキヒトデ Patiria	イトマキヒトデ
M35	陽遂足	クモヒトデ Ophiura	クモヒトデ
M36	陽遂足	テヅルモヅル Asrophyton	テヅルモヅル
M37	海百合	リゾクリナス Rhizocrinus	ウミユリ

M38				
	海百合	コマテュラ Comatula	ウミシダ	
(M5)	「志摩採集	記事」*, K & I , 『動物学雑誌』, 1 巻	ま1号, 1888:和名の大半	は志摩地方の和具(志
		端)における方言		
M39		がぜ	ウニ	
M40		ひとで:Asteria	ヒトデ	
M41		たこまくら:Ophiuron	クモヒトデ	
M42		うみしだ (和具): Crinoid	ウミシダ	名の初出
M43		ありかり(菅島):Crinoid	ウミシダ	
(M6)	『学海探究	之指針・追補』*, 飯島 魁訳, 1889刊	,海軍水路部	
M44		うみしだ,はなひとで Comatula	ウミシダ	
M45		とりのあし Metacrinus	トリノアシ	ウミユリ類の一種:
				名の初出
(M7)	「相州三浦	郡三崎町近傍水産動物採集案内」*,戶	上 浅次郎,動物学雑誌,	2巻, 1890:磯で採集
	できる無礼	脊椎動物について,三崎近辺の何処に	多いかを述べた短報。	
M46		ガゼ	ムラサキウニ?	「岩の穴中」
M47		マンヂュー Clypeaster	タコノマクラ	
M48		タコノマクラ	不明	1
M49		カシパン Scutella	ハスノハカシパン	名の初出:②
M50		イトマキ	イトマキヒトデ	「五角形」
M51		ウミシダ Comatula	ウミシダ	
		タコノマクラ」はヒトデらしいが,記		
		ヽカシパンはScutella japonicaと命名		ンパン」は「菓子パン」
	で、丸。	く薄い形状による命名(むしろビスケ	ットに近いが)。	
(3	₽ F. I. & & ±//. ¬	いそわ		
(M8)	"[甲等教育	育] 動物学教科書』,飯島 幣,1890刊	, 敬業社:類および種に	に対する和名は、「こま
(M8)		育] 動物学教科書』,飯島 魁,1890刊 余いてほぼ現在と変わらない。この教		
(M8)				
(M8) M52	つら」を除			
	つら」を い。	余いてほぼ現在と変わらない。この教	科書の和名が標準名とし	て普及した可能性が高
M52	つら」を い。 —	余いてほぼ現在と変わらない。この教 こまつら Antedon, Actinometra	科書の和名が標準名とし ウミシダ	て普及した可能性が高 図アリ:①
M52	つら」をÑ い。 —— ——	余いてほぼ現在と変わらない。この教 こまつら Antedon, Actinometra うみゆり(一名,とりのあし)	科書の和名が標準名とし ウミシダ	て普及した可能性が高 図アリ:① 図アリ:ウミユリ類
M52 M53	つら」をÑ い。 —— ——	余いてほぼ現在と変わらない。この教 こまつら Antedon, Actinometra うみゆり(一名,とりのあし) Metacrinus	科書の和名が標準名とし ウミシダ トリノアシ	て普及した可能性が高 図アリ:① 図アリ:ウミユリ類 の一種
M52 M53 M54	つら」を い。 — — — —	余いてほぼ現在と変わらない。この教 こまつら Antedon, Actinometra うみゆり(一名,とりのあし) Metacrinus 尋常ノ一種 Ophiuraほか	料書の和名が標準名とし ウミシダ トリノアシ クモヒトデ	て普及した可能性が高 図アリ:① 図アリ:ウミユリ類 の一種
M52 M53 M54 M55	つら」を い。 — — — —	余いてほぼ現在と変わらない。この教 こまつら Antedon, Actinometra うみゆり(一名,とりのあし) Metacrinus 尋常ノ一種 Ophiura ほか てづるもづる Astrophyton	料書の和名が標準名とし ウミシダ トリノアシ クモヒトデ テヅルモヅル	て普及した可能性が高 図アリ:① 図アリ:ウミユリ類 の一種 図アリ
M52 M53 M54 M55 M56 M57	つら」を い。 — — — — —	余いてほぼ現在と変わらない。この教 こまつら Antedon, Actinometra うみゆり(一名,とりのあし) Metacrinus 尋常ノ一種 Ophiura ほか てづるもづる Astrophyton 尋常ノひとで Asterias	料書の和名が標準名とし ウミシダ トリノアシ クモヒトデ テヅルモヅル マヒトデ	て普及した可能性が高図アリ:①図アリ:ウミユリ類の一種図アリ図アリ
M52 M53 M54 M55 M56 M57	つら」を い。 	余いてほぼ現在と変わらない。この教 こまつら Antedon, Actinometra うみゆり(一名,とりのあし) Metacrinus 尋常ノ一種 Ophiura ほか てづるもづる Astrophyton 尋常ノひとで Asterias もみぢがひ Astropecten	料書の和名が標準名とし ウミシダ トリノアシ クモヒトデ テヅルモヅル マヒトデ モミジガイ	て普及した可能性が高図アリ:①図アリ:ウミユリ類の一種図アリ図アリ
M52 M53 M54 M55 M56 M57 M58	つら」を い。 	余いてほぼ現在と変わらない。この教 こまつら Antedon, Actinometra うみゆり(一名,とりのあし) Metacrinus 尋常ノ一種 Ophiura ほか てづるもづる Astrophyton 尋常ノひとで Asterias もみぢがひ Astropecten いとまきひとで Patiria	料書の和名が標準名とし ウミシダ トリノアシ クモヒトデ マビトデ マヒトデ モミジガイ イトマキヒトデ ムラサキウニ	て普及した可能性が高 図アリ:① 図アリ:ウミユリ類 の一種 図アリ 図アリ 図アリ 図アリ:② 図アリ:②
M52 M53 M54 M55 M56 M57 M58 M59	つら」を い。 	余いてほぼ現在と変わらない。この教 こまつら Antedon, Actinometra うみゆり(一名,とりのあし) Metacrinus 尋常ノ一種 Ophiura ほか てづるもづる Astrophyton 尋常ノひとで Asterias もみぢがひ Astropecten いとまきひとで Patiria 普通ノ海胆 Echinometra	料書の和名が標準名とし ウミシダ トリノアシ クモヒトデ テヅルモヅル マヒトデ モミジガイ イトマキ・ウニ ブンブク	て普及した可能性が高 図アリ:① 図アリ:ウミユリ類 の一種 図アリ 図アリ 図アリ 図アリ
M52 M53 M54 M55 M56 M57 M58 M59 M60	つら」を い。 	余いてほぼ現在と変わらない。この教 こまつら Antedon, Actinometra うみゆり(一名, とりのあし) Metacrinus 尋常ノ一種 Ophiura ほか てづるもづる Astrophyton 尋常ノひとで Asterias もみぢがひ Astropecten いとまきひとで Patiria 普通ノ海胆 Echinometra ぶんぶくちやがま Echinocardium	料書の和名が標準名とし ウミシダ トリノアシ クモヒトデ テヅルモヅル マヒトデ モミジガイ イトマキ・ウニ ブンブク	て普及した可能性が高 図アリ:① 図アリ:ウミユリ類 の一種 図アリ 図アリ 図アリ 図アリ:② 図アリ:②
M52 M53 M54 M55 M56 M57 M58 M59 M60	つら」を い。 	余いてほぼ現在と変わらない。この教 こまつら Antedon, Actinometra うみゆり(一名,とりのあし) Metacrinus 尋常ノ一種 Ophiura ほか てづるもづる Astrophyton 尋常ノひとで Asterias もみぢがひ Astropecten いとまきひとで Patiria 普通ノ海胆 Echinometra ぶんぶくちやがま Echinocardium たこのまくら(一名,まんぢう)	料書の和名が標準名とし ウミシダ トリノ トデンシ クテット デッル マモ・ジガイ イトラサナク フンブノマクラ タコノマクラ	て普及した可能性が高 図アリ:① 図アリ:ウミユリ類 の一種 図アリ 図アリ 図アリ 図アリ 図アリ 図アリ 図アリ 図アリ コアリ:② 図アリ コアリコ オ最初の用例
M52 M53 M54 M55 M56 M57 M58 M59 M60	つら」をÑ い。 	余いてほぼ現在と変わらない。この教 こまつら Antedon, Actinometra うみゆり(一名,とりのあし) Metacrinus 尋常ノ一種 Ophiura ほか てづるもづる Astrophyton 尋常ノひとで Asterias もみぢがひ Astropecten いとまきひとで Patiria 普通ノ海胆 Echinometra ぶんぶくちやがま Echinocardium たこのまくら(一名,まんぢう) Clypeaster	料書の和名が標準名とし ウミシダ トリノ トデンシ クテット デッル マモ・ジガイ イトラサナク フンブノマクラ タコノマクラ	て普及した可能性が高 図アリ:① 図アリ:ウミユリ類 の一種 図アリ 図アリ 図アリ 図アリ 図アリ 図アリ 図アリ 図アリ コアリ:② 図アリ コアリコ オ最初の用例
M52 M53 M54 M55 M56 M57 M58 M59 M60 M61	つら」をÑい。	余いてほぼ現在と変わらない。この教 こまつら Antedon, Actinometra うみゆり(一名, とりのあし) Metacrinus 尋常ノ一種 Ophiura ほか てづるもづる Astrophyton 尋常ノひとで Asterias もみぢがひ Astropecten いとまきひとで Patiria 普通ノ海胆 Echinometra ぶんぶくちやがま Echinocardium たこのまくら(一名, まんぢう) Clypeaster ら」はウミシダ類の属名の一つ Coma	料書の和名が標準名とし ウミシダ トリノアシ クモヒトデ マヒトデ マヒトデ イトマキヒトデ ムラサキウニ ブンブク タコノマクラ tulaに由来。資料M15注	て普及した可能性が高 図アリ:① 図アリ:ウミユリ類 のアリ 図アリ 図アリ 図アリ 図アリ :② 図アリ :② 図アリ :② 現タコよ初の用例 ①を参照。
M52 M53 M54 M55 M56 M57 M58 M59 M60 M61	つら」をÑい。	余いてほぼ現在と変わらない。この教徒にまつら Antedon, Actinometra うみゆり(一名,とりのあし) Metacrinus 尋常ノ一種 Ophiura ほかてづるもづる Astrophyton 尋常ノひとで Asterias もみぢがひ Astropecten いとまきひとで Patiria 普通ノ海胆 Echinometra ぶんぶくちやがま Echinocardium たこのまくら(一名,まんぢう) Clypeaster ら」はウミシダ類の属名の一つ Coma 司じ用い方の最初。	料書の和名が標準名とし ウミシダ トリノアシ クモヒトデ マヒトデ マヒトデ イトマキヒトデ ムラサキウニ ブンブク タコノマクラ tulaに由来。資料M15注	て普及した可能性が高 図アリ:① 図アリ:ウミユリ類 のアリ 図アリ 図アリ 図アリ 図アリ :② 図アリ :② 図アリ :② 現タコよ初の用例 ①を参照。
M52 M53 M54 M55 M56 M57 M58 M59 M60 M61	つら」をÑい。	余いてほぼ現在と変わらない。この教徒 こまつら Antedon, Actinometra うみゆり(一名,とりのあし) Metacrinus 尋常ノ一種 Ophiura ほか てづるもづる Astrophyton 尋常ノひとで Asterias もみぢがひ Astropecten いとまきひとで Patiria 普通ノ海胆 Echinometra ぶんぶくちやがま Echinocardium たこのまくら(一名,まんぢう) Clypeaster ら」はウミシダ類の属名の一つ Coma 同じ用い方の最初。	料書の和名が標準名とし ウミシダ トリノアシ クモヒトデ マヒトデ マヒトジガイ イトマミジガキ・ イトマキウニ ブンブク タコノマクラ tula に由来。資料M15注 誌』に連載、和品の図に トリノアシ	て普及した可能性が高 図アリ:① 図アリ: ① 図アリ : ② : ② : ② : ② : ② : ② : ② : ② : ② :

M64		もみぢがひ Astropecten japonicus	モミヂガイ類	
M65		くもひとで	クモヒトデ	
M66		てづるもづる Astrophyton	テヅルモヅル	
		●うに(一名,かぜ)		1
M67		Diadema setosum	ガンガゼ	「長い芒刺あり」
M68		Strongylocentrotus tuberculatus	ムラサキウニ	「濃紫色の芒刺」
M69		Strongylocentrotus depressus	アカウニ	「淡赤色の芒刺」
M70		まんぢう Clypeaster	タコノマクラ	
		●くわしぱん(一名,きけうがひ)		2
M71		Peronella	カシパン	
M72		Echinarachnis mirabilis	ハスノハカシパン	
M73		はすはがひ Echinocardium	ブンブク	3
	①以下3	種,和名の記載は無い		
	②以下2	種,和名の記載は無い。くわしぱん=ヨ	菓子パン,きけうがひ=	=桔梗貝
	③はすは	がひ=蓮葉貝		
(M10))「明治廿四	日年夏期三崎帝国大学臨海実験場」	*,大作宗次郎,動物学	雑誌,3巻,1891
M74		イトマキヒトデ Pentagonaster	イトマキヒトデ	
M75		コマツラ	ウミシダ	
M76		クモヒトデ	クモヒトデ	
M77		タコノマクラ(一名マンヂウ)	タコノマクラ	
		Clypeaster		
(M11))「相州三浦	言三崎採集動物」*,長浜兼吉,動物学雑	註 , 3巻, 1891	
M78		マンヂウ Clypeaster	タコノマクラ	
M79		ブンブクチャガマ Echinocardium	ブンブク	
M80		ウニ Echinometra	ムラサキウニ?	
M81		クハシパン Peronella	カシパン	
M82		イトマキヒトデ Pentagonaster	イトマキヒトデ	
M83		ウミシダ Comatula	ウミシダ	
M84		ヒトデ Asterias	ヒトデ	
M85	—	クモヒトデ Ophiura chinensis	クモヒトデ	
)『動物学染	推誌』4~6巻(1892~94)に掲載され	れた棘皮動物の学名と利	泊名*:大半は属名しか
(M12)	卸してお	- "	70 4 4 1 2 2 2 2 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	
(M12)		らず,それも厳密ではないらしいので,	現和名はあくまで推り	₹.
		らす,それも厳密ではないらしいので, 町採集雑記」*,高松栄太郎,4巻,189		<u></u>
Α	「讃岐坂出		92	Ē.
A B	「讃岐坂出「高浜ニテ	町採集雑記」*,高松栄太郎,4巻,189	92	<u>=</u> .
A B	「讃岐坂出「高浜ニテ	町採集雑記」*,高松栄太郎,4巻,189 採集セシ動物」*,石川一男,5巻,189	92	₹。 A
A B C	「讃岐坂出「高浜ニテ	町採集雑記」*,高松栄太郎,4巻,189 採集セシ動物」*,石川一男,5巻,189 紀行」*,松村松年,6巻,1894	92 93	
A B C M86	「讃岐坂出「高浜ニテ	町採集雑記」*,高松栄太郎,4巻,189 採集セシ動物」*,石川一男,5巻,189 紀行」*,松村松年,6巻,1894 クモヒトデ Ophiura chinensis	92 93 クモヒトデ	A
A B C M86 M87	「讃岐坂出「高浜ニテ	町採集雑記」*,高松栄太郎,4巻,185 採集セシ動物」*,石川一男,5巻,185 紀行」*,松村松年,6巻,1894 クモヒトデ Ophiura chinensis テヅルモヅル Astrophyton	92 93 クモヒトデ テヅルモヅル	A A
A B C M86 M87 M88	「讃岐坂出「高浜ニテ	町採集雑記」*,高松栄太郎,4巻,185 採集セシ動物」*,石川一男,5巻,185 紀行」*,松村松年,6巻,1894 クモヒトデ Ophiura chinensis テヅルモヅル Astrophyton ヒトデ Asterias	92 93 クモヒトデ テヅルモヅル ヒトデ	A A A
A B C M86 M87 M88 M89	「讃岐坂出「高浜ニテ	町採集雑記」*,高松栄太郎,4巻,188 採集セシ動物」*,石川一男,5巻,188 紀行」*,松村松年,6巻,1894 クモヒトデ Ophiura chinensis テヅルモヅル Astrophyton ヒトデ Asterias モミジガヒ Astropecten	92 93 クモヒトデ テヅルモヅル ヒトデ モミジガイ	A A A A B
A B C M86 M87 M88 M89	「讃岐坂出「高浜ニテ	町採集雑記」*, 高松栄太郎, 4巻, 185 採集セシ動物」*, 石川一男, 5巻, 185 紀行」*, 松村松年, 6巻, 1894 クモヒトデ Ophiura chinensis テヅルモヅル Astrophyton ヒトデ Asterias モミジガヒ Astropecten イトマキヒトデ Patirlis	92 93 クモヒトデ テヅルモヅル ヒトデ モミジガイ イトマキヒトデ	A A A A B A
A B C M86 M87 M88 M89 M90 M91	「讃岐坂出「高浜ニテ	町採集雑記」*,高松栄太郎,4巻,185 採集セシ動物」*,石川一男,5巻,185 紀行」*,松村松年,6巻,1894 クモヒトデ Ophiura chinensis テヅルモヅル Astrophyton ヒトデ Asterias モミジガヒ Astropecten イトマキヒトデ Patirlis ブンブクチヤガマ Echinocardium	92 93 クモヒトデ テヅルモヅル ヒトデ モミジガイ イトマキヒトデ ブンブク	A A A A B A A C
A B C M86 M87 M88 M89 M90 M91	「讃岐坂出「高浜ニテ	町採集雑記」*, 高松栄太郎, 4巻, 185 採集セシ動物」*, 石川一男, 5巻, 185 紀行」*, 松村松年, 6巻, 1894 クモヒトデ Ophiura chinensis テヅルモヅル Astrophyton ヒトデ Asterias モミジガヒ Astropecten イトマキヒトデ Patirlis ブンブクチヤガマ Echinocardium タコマクラ Clypeaster	92 93 クモヒトデ テヅルモヅル ヒトデ モミジガイ イトマキヒトデ ブンブク タコノマクラ	A A A A B A A C A

M96		ガゼ Strongylocentrotus tuber-	ムラサキウニ	С
		culatus		
M97		-	イトマキヒトデ	С
M98		ウミユリ一種 Rhizocrinus sp.	ウミユリ	C
	① Echino	metra はナガウニの属名だが,資料M	I8・Mllや,本資料の執	B文ABでは,トゲが
長く, もっとも普通なウニの類を指すらしいので, 該当するのはムラサキウニかと思われる。				
(M13)「江ノ島の Diadema」*,は・じ [原 十太],動物学雑誌, 8 巻,1896				
M99		ガンガゼ Diadema	ガンガゼ	名の初出:トゲが
				細長いウニ
(M14)「海胆の陰	性走光性」*,吉原重康,動物学雑誌,	8巻, 1896	
M100		紫ウニ Strongylocentrotus tuber-	ムラサキウニ	名の初出
		culatus		
M101		青ウニ Sphaerechinus pulcher-	バフンウニ	
		rimus		
M102		ガンガゼ Diadema setosum	ガンガゼ	
M103		コマチ Actinometra	ウミシダ	名の初出:①
M104		アンチドン Antedon	ウミシダ	
M105		ヒトデ Asterias amurensis	マヒトデ	
M106		イトマキヒトデ Patiria	イトマキヒトデ	
M107		アカヒトデ Nardoa semiregularis	アカヒトデ	名の初出
M108		モミヂガヒ Astropecten	モミジガイ	
M109		ヤツデ Pycnopodia	ヤツデヒトデ	
M110		テヅルモヅル Astrophyton	テヅルモヅル	
Mlll		クモヒトデ Ophioplocus imbri-	クモヒトデ	
		cata		
M112		ムラサキウニ Strongylocentrotus	ムラサキウニ	
		tuberculatus		
M113		ブンブクチャガマ Brissus agassizia		
M114		0001	バフンウニ?	名の初出
M115		タコノマクラ Clypeaster japonicus		
①ウミシダ類の別名「コマチ」は、ウミシダ類の属名の一つ Comatula に由来する。資料M 8				
の「こまつら」も同じだが,以後「コマチ」が普及した。				